

裏山の犬にでも喰われる！

登場人物

- 友佳里(現代に生きる魔女、恵の姉)
恵(現代に生きる魔女、友佳里の妹)
堀(友佳里と恵に助けられた男)
和樹(友佳里と恵の従兄弟)
市頭(逃亡中のヤクザ)
玉乃(市頭を匿う女)
塚井(市頭の弟分)
真壁(市頭の兄貴分、クーデターに失敗し殺される)
田村(女、活動停止中の劇団の代表)
茂木(女、田村のかつての仲間)
衛藤(男、田村のかつての仲間)
倉貫(女、田村の大学の後輩)
乾(男、倉貫の恋人、友佳里の友人)
財前(男、戯曲ワークショップの講師)
根本(女、戯曲ワークショップの生徒)
小川(男、市民参加演劇のコーディネーター)
辰次(男、逆子の辰次、市頭たちを狙う刺客)
岡本(拳銃を欲しがる女)
辻神(土着の神)
沖田(美少年、自警団のメンバー)
眼鏡男(フリーマーケットの客)
陽子(友佳里と恵の師匠)

プロローグ

夜。人気がない水辺。
水面に反射する青白い月の光が、二人の女（友佳里と恵）をうつすらと照らしている。

恵
なあ。

友加里
なに？

恵
…やっぱりいい。

友加里
何なの？

恵
気にせんといて。

友加里
気になるやん。

恵
やっぱりいい。

友加里
何か言いかけてたでしょ。

恵
じゃあ言うで。

友加里
うん。

恵
直球やで。

友加里
うん。

恵
ある意味変化球かも。

友加里
前置きが長い。

恵
私らさ、滅びていくんかな。

友加里
え？

恵
おらんようになってしまいうんかな。

友加里
何で？

恵
何か、そんな気がする。

友加里
そんなことないよ。必要としてくれる人はいるよ。

恵
そうかな。長生きしすぎてしまったん違うかなって。

友加里
え？

恵
私たちの一族。やっぱり種にも寿命みたいなものがあるんじゃないかって思う。古い種族やからさ。シーラカンスみたいに。

友加里
シーラカンス？

恵
そう、深い海の底でひっそりと生きる、シーラカンスの最後の二匹。

恵、小石を投げる。ややあつて水に落ちる音。

友加里
それをいうなら二匹でしょ。

恵 あ、ごめん。

友加里 それに歴史が古いつてことはさ、それだけ根源に近いってことやと思わへん？

恵 根源に近い？

友加里 人が生まれた大昔からずっといっしょにいるわけやから、だから簡単には滅びひんよ。

恵 そうかな。

友加里 でも何で？ 何で急にそんな風に思ったん？

恵 うん、また思い出してしまったから。あの日のこと。

あの日のこと。深夜の公園。三人の若者(真壁、市頭、塚井)がやって来る。

真壁は手に金属バットを持っている。三人は人間の形をしたものを囲んで立つ。

真壁 お前らな、臭いねん。

真壁、人間の形をしたものの腹部をバットで殴打する。

市頭と塚井が手を離すと人間の形をしたものは崩れ落ちる。

真壁 小便ちびりよった。

市頭 真壁さん。

真壁 何や。

市頭 ちよっと、やりすぎですって。

真壁 はあ？

市頭 あ、いや、その。

真壁 何を今更いい子ぶっとんねん。お前もさつき蹴り入れとったやろ。

市頭 そうですけど。

真壁 (塚井にバットを示して)お前も一発やるか？

塚井 いえ、いいです。

真壁 (人間の形をしたものに向かって)おい、わかったか？

真壁、バットで人間の形をしたものを更に殴打しようとする。

市頭、慌てて真壁を止める。

真壁 わかったらさっさとこの町から出て行けよ。

市頭 真壁さん。

真壁 何やねん。

市頭 やりすぎですって。ちょっと痛めつけるだけって話やったじゃないですか。

真壁 だからちよっと痛めつけてるんやろうが。

市頭 死にますよこれ以上やったら。

真壁 別に死んでもいいんじゃない？

市頭 え？

真壁 その方がみんな喜ぶよ。こいつら汚いし臭いし目障りやろ。みんな迷惑してるやん。

(塚井に)なあ？

…はい。

真壁 だいたい公園は公共の場やぞ。そこに勝手に家建てて住むとか考えられへん。誰かが罰を与えんと。

だからってここまでせんでも。

真壁 わかってないなあ。こいつらは社会に必要な人間やねん。働いてもないし何も生産してない。公共の場である公園を不法に占拠して、周りに迷惑かけてるだけやろ。公園から出て行かそうと思ったら、またやれ施設やら何やら税金使わなあかん。このご時世、税金の無駄遣いはあかんのちゃうの？ 俺何か間違ったこと言うてる？

市頭 …。

真壁 次いくぞ。

陽子声 Double double toil and trouble(強弱4歩格で)

真壁 誰や。

突然、突風が吹き荒れて真壁たちを襲う。

陽子声 fire burn and cauldron bubble(強弱4歩格で)

真壁たちの前に巨大な人影が立ちふさがる。

塚井 (腰を抜かして)うわああああ。出た。出た。

真壁 何やお前は。

真壁、バットで影に打ちかかる。バットを振り回しているうちに、何かに当たった音がして、影が消える。突風もおさまる。

市頭と塚井が駆け寄って真壁を止める。

市頭 真壁さん、この人ホームレス違いますよ。女の人ですよ。

真壁 あ？

市頭 息してませんよ。

塚井 ど、どうしよう、どうしよう。

市頭 救急車。

真壁 あほか。おい逃げるぞ。塚井。

塚井 はい。

真壁 (金属バットを渡して)お前これどこかに捨ててこい。

塚井 (受け取って)ええっ? どこかって?

真壁 自分で考えろ。

塚井 ええっ?

真壁 お前ら、これは俺らだけの秘密やぞ。誰にも言うなよ。

塚井 言いませんよ。

真壁 俺らは今から一連託生や。市頭も、わかったな。

とそこへ獣の唸り声と共に毛むくじやらの何かが現れ、塚井の足に噛みつく。塚井、悲鳴を上げる。真壁、塚井が落とした金属バットを拾い、毛むくじやらを殴りつける。毛むくじやらはキャインとひと鳴きして息絶える。
友佳里と恵、その様子をずっと見守っている。

恵 陽子さんのこと、シロのこと、思い出してしまったから。私は許さへん。こいつらのことを、絶対に。

友佳里 私も許さへん。

塚井と市頭、ほうほうの体で逃げ出す。

恵 でも復讐は無しなんやろ?

友佳里 そう、復讐は無し。

恵 何で?

友佳里 それが陽子さんと、私たちの生き方やから。

友佳里、立ち去る。

恵 私は、お姉ちゃんとも、陽子さんとも違うのかもしれない。

恵、そっと真壁に耳打ち。

真壁 待て。あいまいな言い方をするな。

しかし、真壁は恵を見失う。自らの影に気づいて。

真壁

消えろ、消えろ、つかの間の灯。人の生涯は動き回る影にすぎぬ。哀れな役者だ。

軍鼓やトランペットの音。鬨の声。燃え上がる城。右往左往する兵士たち。音楽。あの日から五年後。

ヤクザの幹部になった真壁は、刺客である逆子の辰次に追い詰められている。

辰次

待て真壁、裏切り者、篡奪者、待てというに。

真壁

ハッハー、いくらあがこうと無駄だ。貴様のドスがどんなに鋭かろうと、この手ごたえなしの空気は切れぬ、俺の体に傷はつけられぬぞ。俺の命はまじないつきだ。女の股から生まれた者には手がつけられないのだ。

辰次

そんなまじないの効き目、いつまでも続くものか。この逆子の辰次、母親の腹を破って出てきた男だぞ。

真壁

何ということだ。その一言に勇氣もくじけた。あのイカサマの占い師め。俺をことごとく毘にかけ、約束は守りながらまんまと裏をかく。よせ、貴様を相手にしたくない。

辰次

逃げるな、卑怯者。それならチャカを捨て、生きて見世物になれ。貴様の絵姿を看板に掲げ、その下にこう書いてやる。さあさあ、裏切り者をご覧せろとな。

真壁

畜生、たとえバーナムの森がダンシネインの城に迫ろうと、女の股から生れぬ貴様を相手にしようと、いいだろう。これが最後の運試しだ。かかってこい、辰次。

真壁、拳銃を撃つ。辰次、真壁の腹にドスを突き立てる。

真壁の断末魔。音楽、盛り上がる。

暗転。

夜。虫の鳴き声。畳の部屋。ベランダのある木造のアパート。二階。
カーテンが夜風に揺れている。

派手なジャージを着た柄の悪い男(市頭)が携帯電話で話をしている。

市頭

おう、そうか。いよいよヤバくなってきたな。これから？ いいけど、お前大丈夫
なんか？ いや、信用してないわけじゃないけど。つけられたりするなよ。森が動
いてるんやろ？ あいつは執念深いからな。

玄関のチャイムの音がする。

市頭

お、帰って来た。いや、こっちの話。後で詳しく説明するわ。くれぐれも気をつけ
てな。

市頭、電話を切る。

再び玄関のチャイムの音。

市頭

はいはい。

市頭、玄関へ。

市頭

裏山の犬にでも。

女の声

喰われる。

市頭が女(玉乃)を連れて戻って来る。玉乃は薄汚い鞆と、食料品の入ったスーパー
の袋を持っている。

玉乃

ちよっと何？ その恰好。

市頭

え？

玉乃

やめてって言うてるやろ、その恰好。

市頭

何で？ 俺の二張羅やぞ。

玉乃

ダサいから。私の買ってあげた服は？ あのポールスミスのシャツは？

市頭

洗濯中。

玉乃

洗濯したんや。

市頭

おう。

玉乃

自分で？

市頭 洗濯ぐらい出来るわ。

玉乃 成長したやん。

市頭 馬鹿にしてんのか？

玉乃 だって最初何にもできひんかったやん。あ、ちゃんと洗濯ネットに入れて回した？

市頭 洗濯ネット？

玉乃 百均で買ってきてあげたやろ？

市頭 知らんぞそんなもん。

玉乃 ちよっと、ちゃんとエメール使ったやろうな。

市頭 エメール？

玉乃 アタックは漂白剤や蛍光剤が入ってるからお洒落着はエメールで洗わんと。

市頭 ええっ？

玉乃 服が傷むやん。

市頭 細かいこというなよ。

玉乃 ちよっと何してくれてんの。あの服高かったのに。

市頭 俺の服やろ。ほっといてくれよ。

玉乃 買ったん私やろ。

市頭 ああもう、せっかくだまには自分で洗濯してみようと思っただのに。もう洗濯

玉乃 せーへん俺は。

市頭 何いじててんの？

市頭 いじけてないよ。

玉乃 貸倉庫、行ってきたよ。ほら、この鞆やろ？

市頭、汚い鞆を受け取る。

玉乃 何が入ってるん？

市頭 それは聞かん方がいい。

玉乃 ふーん。

玉乃、洗濯機のあるベランダへ。

玉乃 ちよっと洗濯機のフタ閉めてないやん。すすぎで止まってるんですけど。

市頭 あ。

玉乃 ほんまに何もできひんねんな。どうせ今まで全部女の人にやってもらってたんやろ。

市頭 そうや。悪いか。

玉乃 悪い。そういう考え方が一番あかんねん。家庭内の美観が専業主婦という奴隷制度

の上に成り立っているということに対する男の無自覚さ。これが一番良くないと思うの私は。

市頭 わかった。わかったから。

玉乃 本当にわかってる？

市頭 わかってる。わかりました。

玉乃 まあいいわ。じゃあさっそく始めましょうか。

市頭 え？

玉乃 勉強会。

玉乃、座ると自分の鞆から勉強会グッズを取り出して並べる。

玉乃 課題図書は読んだ？ 第一部第二章。

市頭 お、おう、よんだよ。

玉乃 私は三回も読んだよ。

市頭 三回も？

玉乃 当たり前やん。ケイト・ミレットの性の政治学といえは私たちジェンダーの研究者にとってはバイブルやねんバイブル。何度読んでも新しい発見があるっていうか、そもそも一度読んだだけでわかるような底の浅い本じゃないっていうか。

市頭 あの誠に申し上げにくいんやけど。

玉乃 なに？

市頭 読んでないねん。

玉乃 え？ 何が？ 何を？

市頭 だからその、ケイト・ミレット。

玉乃 はあ？ 何で？

市頭 いやー、忙しくて。

玉乃 何が忙しいの？ ずっと部屋でゴロゴロしてるだけやん。

市頭 何ていうかさあ。何で俺が、フェミニズムなんか勉強せなあかんのかなあって。

玉乃 なんか？

市頭 あ、いや。

玉乃 私はそのなんかを教えるのが仕事なんですけど。

市頭 何かは言いすぎた。言いすぎたけど。

玉乃 約束やろ？

市頭 そうやけど。

玉乃 勉強するっていうたやろ？

市頭 でもさ、俺は男やぞ。

玉乃 男やからするんやろ。啓蒙やねん。自由になるためやねん。既存の概念から、ファ

市頭 ロゴサントリズム、男根論理至上主義から脱却しないと。

市頭 (耳を塞いで) あー。

玉乃 何その態度。

市頭 あ、いや。

玉乃 この家賃は誰が払ってるん？ 誰が働いてるん？

市頭 だから働かないんじゃないんで働けないんじゃないんで。

玉乃 ……帰る。

市頭 え？

玉乃 私もう帰るね。

玉乃、そそくさと帰り支度。

市頭 何で？

玉乃 課題図書読んでないんやったら来た意味ないし。

市頭 おい。

玉乃 明日仕事で早いし。

市頭 ちょっと待てよ。

市頭、立ちふさがって。

市頭 もう遅いから泊っていったら？

玉乃 何で？

市頭 もう終電ないやろ。

玉乃 タクシーで帰るし。

市頭 あのさ、俺、寂しいねんな。ずっと一人でここに籠りつきりやんか。一日中誰とも
会わへんし…。

泊ってもいいけど。寝る時は別々な。

市頭 何で。

玉乃 よくないし。

市頭 いいやん別に、この間だっさ。

玉乃 あれはちよっと流されただけ。

市頭 流されようよ。

玉乃 (怒りだして) あのね、あなたは私との勉強会で何を学んだわけ？ フーコーも言っ
てたやろ？ セックスこそが男女、いえ女男不平等の根源やねん。本来多様である
はずの女性性をVに限定し、抑圧し、不自由にする。
市頭 わかった。わかったから。

玉乃 本当にわかってる？

市頭 だからあれだろ、ファログなんかリズムやる。

玉乃 ファログサントリズム。

市頭 要するに(メモを盗み見ながら)医学的にも統計上、女性の体には感覚的な場所が沢

山あって。

玉乃 そう、それだけ自由で多様で多義的なの。

市頭 一方、男性は一か所に集中している。

玉乃 そう、Pね、Pのみ、何て単純で不自由で愚かなのかしら。

市頭 そしてセックスは男性性に合わせて女性性の多様性を単純化する行為である。

玉乃 そう、Pに合わせてVだけに限定して、抑圧して、不自由にする。そう、そういう

こと。よくできました。

市頭 だけどさー。

玉乃 なに？

市頭 わかるよ、理屈では。確かに抑圧はよくない。でもさ、じゃあこの俺の孤独はどうしたらいいの？ 誰が癒してくれるの？

玉乃 はあ？ 知りませんそんなのは。自分で癒したら？

市頭 そんなこと言わないでさ。

玉乃 それ以上近寄ると。

玉乃、靴から警棒を取り出して戦闘態勢に入る。

玉乃 私の三段伸縮特殊警棒がお相手しますけど試してみる？

市頭 何でそんなもの持ってるん？

玉乃 護身用。これで夜道でも安心ね。

市頭 危ないからしなさい。

玉乃 私に指一本でも触れたら頭カチ割ってここから叩き出すよ。

玄関のチャイムの音。ドアを叩く音。

男の声 市頭さん、俺です。

玉乃 え？ 誰？

市頭 俺の知り合い。さっき電話がかかってきてな。

玉乃 大丈夫なん？

市頭 大丈夫、塚井は信用できる奴やから。

市頭、玄関へ。

男の声 どうも、お久しぶりです。

市頭 おう、まあ上がれや。

男の声 はい、お邪魔します。

市頭、チンピラ風の男(塚井)を連れて戻って来る。

塚井 お邪魔します。

玉乃 いえ。

市頭 この人はあれや、玉乃さんっていうて、俺の命の恩人だな。

塚井 命の恩人？

市頭 俺が行き倒れてるところを助けてくれてな。

玉乃 玉乃といます。

塚井 塚井です。市頭さんの弟分です。

市頭 (弟分を打ち消すように) 同僚。

塚井 そう、同僚です。

玉乃 はあ。

市頭 でさ、悪いんやけど、ちょっと外してくれへん。

玉乃 いいけど。

市頭 ほんまごめん。

塚井 姉さん、さーせん。

玉乃 どうぞごゆっくり。

玉乃、隣の部屋へ。

塚井 こんなところに隠れてたんですね。森に拉致られたってきいてたんで、もうとつく

にどこかの山にでも埋められたものかと思ってましたわ。

市頭 お前こそよく生きてたな。

塚井 でも意外ですわ。市頭さん、ああいう女もいけるんですね。

市頭 おいおい、勘違いするなよ。

塚井 だって市頭さんのコレ(小指を立てて)でしょう？

市頭 違うって。

塚井 違うんですか？

市頭 変な女やねん。森のところから逃げ出した俺を助けてくれて、匿ってくれたんやけ

ど。見ず知らずの俺を。何でやと思う？

塚井 それはやっぱり惚れてるからでしょ、市頭さんに。

市頭 やっぱりそうかなあ。

塚井 いいじゃないですか。俺なんかネットカフェすよ。

市頭 お前も苦労してるな。

塚井 それでね市頭さん、頼みがあるんですけど。金貸してもらえませんか？

市頭 すまんけど、無理な相談やな。俺も今はあいつに養われてる身やから。

塚井 やっぱりそうですか。何でこんなことになってしまったんですかね。真壁さんさえ生きてくれてたら。

市頭 …。

塚井 俺、あの占い師のせいやと思うんですよ。あの占い師にはまりだしてから真壁さんおかしくなつたんですよ。

市頭 済んだこと言うてもしゃーないやろ。

塚井 クーデタなんて成功するはずなのに。あんな殺され方して。

市頭 それよりも、さっきの話はほんまなんか？ 森が逆子の辰次呼んだつていう。

塚井 はい、間違いないですね。

市頭 森と逆子か。最悪の組み合わせや。早くどこかに逃げた方がいいな。しかしそうなるど金があるな。

塚井 市頭さん、真壁さんから預かってた例のもの、まだ持ってます？

市頭 持ってるけど、どうした？

塚井 売って金にしませんか？

市頭 売るって誰が買うねん。

塚井 俺が探してきますよ、心当たりなくはないんで。

市頭 でもな、あれはいざという時のために真壁さんから預かったものやから。

塚井 今がいざという時ですよ。金さえあれば偽造パスポートも造れますし。

市頭 でも、もし森と逆子に見つかった時に身を守る手段が欲しいし。

塚井 市頭さん、使ったことあるんですか？

市頭 いや、実はないねんけど。

塚井 じゃあ意味ないですよ。それよりも金に換えて見つかる前に逃げた方がいいですよ。

市頭 うーん。

塚井 お願いします。買い手が見つかったら連絡しますんで。

塚井、帰ろうとする。

市頭 もう帰るんか。

塚井 はい、さっそく心当たりに連絡してみます。

市頭 おう、くれぐれも気をつけてな。

塚井 はい、姉さんにもよろしく。

市頭 姉さん言うな。

塚井 それじゃ。

塚井、立ち去る。市頭、塚井を見送って。

市頭 大丈夫かな。

玉乃、戻って来る。

玉乃 何が？

市頭 いや、こっちの話。

玉乃 あの人の、帰った？

市頭 ああ、うん。

玉乃 お茶ぐらい出した方がよかったかな。

市頭 いいよいいよ。

玉乃 ふーん、だったらいいんやけど。

市頭 ……何で？

玉乃 何が？

市頭 何で何も聞かへんの？ 俺のこととか。あいつのこととか。明らかに怪しいやろ。

玉乃 別に興味ないし。

市頭 変な女やな。

玉乃 じゃあ聞くけど、出ていくの？

市頭 聞いてたんか。

玉乃 ちよっとだけ。

市頭 行かへんよ。金ないし。

玉乃 (薄汚い鞆を示して) そのの中身が売れたら出ていくんやろ？

市頭 ……心配せんでも、そうそう買い手がつく物ちやうから。

ベランダから洗濯機のアラーム音がする。

市頭 洗濯、出来たみたいやな。

夜。ベランダのある畳の部屋。アパートの二階。

隣の部屋から、若い男(乾)がふらふらとやって来る。前のめりに倒れる。

乾 …何やってんねん、俺。

隣の部屋から、女(友佳里)がやって来る。

友佳里 なあ。

乾 はい。

乾、慌てて起き上がる。

友佳里 何してんの？

乾 え？

友佳里 何してんの？

乾 えーっと、トイレ。トイレ行って、帰ってきて、寝てた。

友佳里 こんなところ？

乾 こんなところで。

友佳里 ふーん。

乾 服、着たんや。

友佳里 だって乾君も着てるやん。

乾 おう。

友佳里 …お腹減ったな。

乾 え？

友佳里 お腹減った。

乾 何か食べに行く？

友佳里 行く。

乾 何がいい？

友佳里 何でもいい。

乾 この時間やしな、飲み屋かラーメンぐらいしかないけど。

友佳里 ラーメン？

乾 ラーメンがいい？

友佳里 ラーメンによる。

乾 高井田系は？

友佳里 高井田系？

乾 濃いめの醤油ベースのスープに太麺、厚切りのネギがかかっている。

友佳里 うーん。

乾 じゃあファミレスは？ ちょっと遠いけどガストあるよ。

友佳里 なあ。

乾 なに？

友佳里 何で最後までせーへんかったん？

乾 え？

友佳里 だから何で最後までせーへんかったん？

乾 いや、その。

友佳里 私が可愛くないから？

乾 いや、そうじゃない、可愛いよ。可愛いから声かけたんやん。

友佳里 じゃあ何で？ 彼女に悪いと思った？

乾 え？

友佳里 彼女いるんやろ？

乾 な、何で？

友佳里 ゴミ箱の中に使用済みのメイク落としシートあったけど。

乾 ああ。

友佳里 別にいいんやけど。私も話があったただけやから。

乾 そうなんや。じゃあよかった。よかったやん。

友佳里 でも服脱がしといて最後までせーへんていうのはどうなん？ 女としてのプライ

ドが傷つくなあ。

乾 今から、やり直そうか？

乾、服を脱ごうとする。

友佳里 無理せんでいいよ。

乾 無理してないよ。

友佳里 乾君には無理やから。

乾 そんなん、やってみんとわからへんやろ。

友佳里 何か違うなって思わへんかった？

乾 …。

友佳里 何か違うって思ったから。だから途中でやめたんやろ？ それが私と乾君の関係や

ねん。最初からわかってたのに、意地悪してごめんな。

乾 どういうこと？

友佳里 それより話、してよ。

乾 話？

友佳里 ほら、言ってたやん、変な夢見るって。

乾 ああ、その話か。

友佳里 詳しく。

乾 いいけど。

友佳里 聞かせてよ。

乾 …いつも見る夢があるねん。俺は犬で、野良犬やねん。淀川の河川敷で仲間と楽しく暮らしてたんやけど、野犬狩りの人間がやって来て、みんな捕まってしまうねん。俺は一匹だけになって、あちこちさ迷うんやけど、ある人たちに拾われて、飼われるねん。髪の毛の長い綺麗な女の人と、幼い姉妹。俺はその人らのことをずっと守って、いくつて心に決めるんやけど。

友佳里 やけど。

乾 俺の方が先に死んでしまうねん。他の人間に殺されるねん。

友佳里 悲しい夢やな。

乾 いつも目が覚めるとブルーになる。

友佳里 それってさ、もしかすると乾君の前世の記憶違うかな。

乾 それはない。

友佳里 何で？

乾 実はこの夢には理由があって、友達が演劇やって、そこに似たような話があったん。

友佳里 演劇？

乾 そう無理やりチケット買わされて仕方なく見に行ったんやけど。別に面白かったわけでもないし。でも夢にまで見るってことは、やっぱり印象に残ってるんかな。

友佳里 ふーん、その友達って彼女のこと？

乾 え？ 何で？

友佳里 だって本棚に演劇の本あったけど。乾君あんな本読むん？ シェイクスピアとか。

乾 読むよ。こう見えて読むよ、シェイクスピア。

友佳里 マクベスってどんな話？

乾 ラーメン食べに行こうか。お腹減ってるやろ。

友佳里 乾君の奢りで？

乾 奢る奢る、いくらでも奢るよ。

友佳里 やった。でもまた今度ね。

友佳里、隣の部屋に戻り鞆を取って来る。

友佳里 はいこれ。

友佳里、乾に名刺を渡す。

乾 何これ。

友佳里 私の名刺。せっかくやし友達になろうよ。また連絡ちょうだい。

乾 どこ行くん？

友佳里 残念ながら今から仕事やねん。

乾 仕事？ ラーメンは？ 高井田系は？

友佳里 また今度ね。

友佳里、帰ろうとする。

乾 仕事って何してるの？ こんな時間から。

友佳里 …魔女。

乾 魔女？

友佳里 まあ占い師みたいなものかな。それよりさっきの夢の話、もう少しよく思い出して
みて。たぶん乾君とって大切なことやと思うから。それじゃまたね。

友佳里、立ち去る。

乾、独り残されて。

乾 夢？ 魔女？

昼間。ベランダのある畳の部屋。郊外のアパートの一階。

女(友佳里)が一人、段ボールを抱えてやって来る。段ボールを部屋の真ん中に置く
と、その上に乗せていた本を開いて読み始める。

そこへ、もうひとり女(恵)が扇風機を抱えてやって来る。

恵 お姉ちゃん。

友佳里 …。

恵 何サボってるん？

恵、友佳里の読んでいる本を奪い取る。

友佳里 あ、ちよっと。

恵 何読んでるん？

友佳里 きれいは穢い、穢いはきれい。

恵 あ、それ何か聞いたことある。

友佳里 マクベスっていう戯曲。

恵 私これ嫌い。

友佳里 何で？

恵 だって私ら悪者やん。

友佳里 悪者ってわけではないと思うけど。

恵 こんな本、どこにあったん？

友佳里 押し入れの中。前に住んでた人の忘れものかな。(段ボールの中を示して)他にもあるよ。

友佳里、段ボールの中から本を一冊ずつ取り出しながら。

友佳里 性の政治学、性の弁証法、強制的異性愛とレズビアン存在。

恵 何かエロそうな本ばかりやな。

友佳里 違うよ。これたぶんフェミニズム関係の本やと思う。

恵 フェミニズム？

友佳里 ほら、陽子さんも言うてたやん、魔女とフェミニズムは関係が深いって。

恵 うーん、私、座学は苦手やったからさ。どっちかっていうと実践派やから。

友佳里 はいはい。

恵 でことはさ、前にここに住んでた人も私らみたいなのやったんかな。

友佳里 そうかもしれないな。

恵 これは使えるかも。

友佳里 何の話？

恵 ここの掃除は終わった？

友佳里 とっくの昔に終わってるよ。

恵 台所は？

友佳里 堀さんがやってる。

恵 (台所に)おーい。堀。

男の声 はーい。

恵 そっちはどう？

男の声 もう終わりまーす。

恵 休憩にするよー。

男の声 はーい。

恵 ハーブティー飲みたいなあ。

友佳里 賛成。

恵 ポットは？ どの段ボールに入れたけ？

友佳里 さあ。

恵 もういいわ。缶コーヒー買ってきて。

友佳里 えー。

恵 じゃんけん。

友佳里 ほい。

友佳里が勝つ。

恵 畜生。

友佳里 私、いつものやつな。

台所から中年の男(堀)がやって来る。

堀 お疲れ様です。台所、もうほとんど終わりましたよ。

友佳里 ありがとうございます。

堀 後は残りの荷物運び込むだけですわ。

恵 堀、ちようどいいところに来たわ。

堀 はい？

恵 缶コーヒー買ってきて。

堀 え、あ、はい。

友佳里 ちよっと恵。

恵 なに？

友佳里 それはないんとちがう？

恵 何で。

友佳里 引越し手伝ってくださってるのに。わざわざ有給までとって。

堀 いやいや友佳里さん。

恵 そんなん、こいつが好きでやってることやん。

友佳里 こいつって、またそんな言い方して。ほんとすみません。

堀 いえいえ、僕も好きで手伝ってますんで。

友佳里 わざわざ有給までとって手伝ってくださってるのに。

恵 そんなに有給強調して頂かなくても。

堀 何か下心があるからちがうの。こないだも魔法少女のアニメが好きとかいうてたしさ。

堀 あの、僕買って来ますんで。銘柄はえーっと。

友佳里 恵が買ってきて。

恵 何で。

友佳里 例えジャンケンといえど、一度成立した約束を破るのはよくないと思う。私らは常日頃から契約という概念に敏感でないといけないうって陽子さんも言ってたやろ。

恵 はいはい。

堀 あ、僕行きますよほんと。

恵 ちょっと邪魔。

友佳里 堀さんは座っててください。

堀 はい。

恵、立ち去る。堀、座る。

堀 あの、ほんと、気をつかわないてくださいね。お二人は私の命の恩人なんですから。引越しの手伝いくらいお安いご用なんですから。

友佳里 もうその件はお気になさらず。

堀 そういふわけにはいきません。お二人の力になりたいんですよ。

友佳里 そうですか。

堀 それにしても(部屋を見回して)ここいいですよ。間取りはちょっと変ですけど、広いし、庭もあって。家賃おいくらなんですか？

友佳里 二万円です。

堀 二万円？ 共益費は？

友佳里 こみで。

堀 破格ですね。こんなこと言うたらあれなんですけど、何か出るんちがいます？

友佳里 そうなんです。実はあるんです。

堀 ええっ？

友佳里 だからここに決めたっていうのもあるんです。

堀 どういうことですか？

友佳里 それともう一つ理由があるんですよ。陽子さんがね、昔、このアパートに住んでたんです。

堀 陽子さんって、お二人の師匠の？

友佳里 はい。

堀 日本魔女界のパイオニアの割には渋い趣味してますね。魔女といえば町はずれの洋館でしょ、蔦の絡まった。

友佳里 日本にそんな建物なかなかないですからね。

堀 それにしてもこんなアパートに魔女が住んでたなんて。

友佳里 良い魔女はだいたい貧乏ですから。

堀 前から聞きたかったんですけど、陽子さんってどんな人なんですか？

友佳里 どうしてですか？

堀 僕はお二人のこともっと知りたいんです。その為には陽子さんのことも知っておかないと思いますよ。

友佳里 うーん、そうですね、筋金入りのペイガンでしたね。

堀 ペイガン？

友佳里 多くの神を信じる者っていう意味なんですけど。要するに、自由で多様で多義的な生き方を追求するというか、実践していた人でしたね。よくこんなことを私たちに言っていました。真実が一つしかないって考え方が争いを生み、人を不幸にするんやっつて。

堀 へー、いい言葉ですね。

友佳里 後は、すごく魔女らしい人でしたね。

堀 魔女らしい人？

友佳里 普段はぐーたらしてるんですけど、いざとなったら凄く頼りになるんです。逆に言えばいざとならないと頼りにならないんですけど。

堀 はあ。

友佳里 もともと魔女っていうのは、中世ヨーロッパにおいて、村はずれに一人で住んでいる女性を指す言葉だったんです。共同体の外側に位置する存在であり、普段は生産的なことに従事しないんですけど、いざ村の中で困ったことが起きた時に活躍する。例えば子供が病気になったら薬を作ってあげたり、大雨や干ばつなどの天災を予知したり。陽子さんはまさしくそんな人でした。本当やったら人が沢山死ぬはずやった事故を未然に防いだこともあるんですよ。ええっ、凄いいじゃいですか。

堀 恵、缶コーヒーを買って戻って来る。

恵 何が凄いの？

堀 陽子さんですよ。今、友佳里さんから話聞いてたんですけど、さすがお二人の師匠だけあって、凄い人なんですわねえ。

恵 お姉ちゃん、堀にあんまり余計な話せん方がいいよ。

友佳里 何で？

恵 説明するのが面倒臭いから。

堀 友佳里さん、一度会わせてくださいよ、陽子さんに。

恵 ほら。

堀 ここまで話聞いたら会ってみたくありませんよ。

恵 無理。

堀 何ですか？

堀 もうこの世にはおらんから。

堀 え？

堀 だから無理やねん。わかった？

堀 そうなんですか。何ていうか、すみません。

三人、缶コーヒーを開けて飲み始める。

恵 うーん、やっぱりハーブティーにしといたらよかったかも。

友加里 そうやね。

堀 あの、こんなこと聞いていいかわからないんですけど。

恵 なに？

堀 どうして亡くなられたんですか？

恵 うーん、事故みたいなものかな。

堀 事故？

玄関のチャイムの音。

恵 あれ？ 誰やろ？

友佳里 さあ。

恵 ちょっと見てくるわ。

恵、玄関へ。

堀 まだ引越しも終わってないのに、あ、前に停めてある軽トラ、大丈夫ですかね？

邪魔になってないといいけど。

恵、戻って来る。

恵 ちょっとちょっと、懐かしい人が来たよ。

スーツ姿の男(和樹)がやって来る。

和樹 よう。久しぶり。

友佳里 和樹さん、何で？

和樹 いや、お前ら引越しやってるって聞いて陣中見舞いに。

恵 誰から聞いたん？
和樹 たまたま大婆様に連絡した時にな。
恵 そうなんや。大婆様、言っただけだった？ たまには島に帰って来いって。
和樹 俺もいろいろあってな。
友佳里 今何してるんですか？
和樹 不動産屋で働いてる。
友佳里 占いはもうやってないですか？
和樹 そっちはもう足洗った。
友佳里 そうですか。
和樹 まあ占いで学んだことは不動産屋でもそれなりに役立つから。
恵 またろくでもない商売やってるんちゃう？
和樹 それにしても、このアパート何も変わってないなあ。懐かしいわ。
友佳里 でしょ。
和樹 まさか、お前らがここに帰ってくるとはな。
恵 当たり前やん、この町は私らが守っていくって決めたんやから。
和樹 修行大変やったやろ。大婆様厳しいから。
恵 まあね。
和樹 俺は途中で逃げ出したクチやから。
堀 あのすみません。
恵 ああ、忘れてた。紹介するわ、私らの従兄弟の和樹。
堀 従兄弟？
恵 私らのお母さんの、お姉さんの、息子。従兄弟であってるよな？
友佳里 あってる。
恵 (和樹に)で、これは堀っていう、最近知り合った魔法少女のアニメが好きなオッサン。
友佳里 堀さんでしょ。
恵 堀さん。
堀 どうも、堀です。
和樹 和樹です。
友佳里 わざわざ有給までとって引っ越し手伝いに来てくださってるんです。
堀 いやいやそんな、これ以上有給の話はいいですから。
和樹 あ、そうそう、これ差し入れ。

和樹、手に持っていたお土産を渡す。

友佳里 そんな気を使っていたただかなくても。

恵 なになに？

和樹 駅前のあの店で買ってきたよ。特選佐藤錦のタルト。

恵 めっちゃ高いやつやん。陽子さんも好きやった。

友佳里 まだあのお店あるんですか？

和樹 息子さんが店継がはってな、味は落ちてない。

恵 やっぱり缶コーヒー飲んでる場合違うわ。お茶入れよう、ハーブティー。

友佳里 そやね、せっかくやし。

恵 ポット探そう。

友佳里 たぶんあそこがうかな、薬草入れた中くらいの段ボール。

恵 はいはい、トリカブトとかヤバめの入れたあれね。

友佳里 そうそう、薬研と一緒に入れた気がする。

和樹 ところでお前からこっちで表の仕事見つかったんか？ よかったら俺の知り合いが

占いの館経営してるんやけど、

友佳里と恵と和樹も隣の部屋へ。

堀 ちょっと、僕も話に入れてほしいんですけど。

昼間。ベランダのある畳の部屋。郊外のアパートの一階。

女(田村)が一人、段ボールを抱えてやって来る。段ボールを部屋の真ん中に置くと、その上に乗せていた冊子を開いて読み始める。

田村 懐かし。

そこへ女(茂木)が扇風機を抱えてやって来る。

茂木 田村。

田村 …。

茂木 何サボってるの。

茂木、田村の読んでいた冊子を奪い取ろうとするが、田村はかわして。

田村 聞こえてるよ。

茂木 聞こえてるんやったら返事してよ。何読んでるん？

田村 いや、懐かしいなって思っ
なに？

田村 夜叉ヶ池。(台本を読む)この土地、この里、この琴弾谷が、一個の魔法つかいだ
というんだよ。(茂木にもう一冊の台本を渡す)

茂木 えー、懐かしいなあ。

田村 山沢、君は、この山奥の、夜叉ヶ池というのを聞いたか。

茂木 (台本を開いて聞いた。しかもその池を見ようと思っ、今庄駅から五里ばかり、
わざわざ此処まで入込んだのじゃ。

田村 僕も一昨年、その池を見ようと思っ、唯一人、この谷に入ったために、こういう
次第になったんだ。ここに鐘がある。

茂木 ある！ 何か、明六つ、暮六つ、丑満、と一昼夜に三度鳴らす。その他は一切音を
させない定めじゃと聞いたが。

田村 ここに伝説がある。昔、人と水と戦っ、この里の滅びようとした時、越の大徳泰
澄が行力で、竜神をその夜叉ヶ池に封込んだ。竜神の言うには、人の溺れ、地の沈
むのを救うために、自由を奪わるるは、是非に及ばん。そのかわりに鐘を鑄て、麓
に掛けて、昼夜に三度ずつ撞鳴らして、我を驚かし、その約束を思い出させよ。：
山沢、そのために鑄た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、立処に、大雨、大雷、
大風とともに、夜叉ヶ池から津波が起こっ、村も里も水の底に葬っ、竜神は思
うままに天地を馳すると、こう、この土地で言伝える。そのために、明六つ、暮六
つ、丑満つ鐘を撞く。

茂木 面白い。

田村 いや、面白いでは済まない、大切なことです。

茂木 如何にも大切な事じゃ。

田村 ところで、その鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思っ。

茂木 君か。

田村 僕だよ。即ち萩原晃がその鐘撞夫なんだよ。

茂木 はてな。

田村 ここに小屋がある。

茂木 むむ。

田村 鐘撞に住む小屋で、一昨年の夏、私が来て、代るまでは、弥太兵衛という七十九に
なる爺様が一人いて、これは五十年以来、如何な一日も欠かすことなく、一昼夜に
三度ずつこの鐘を打っていた。山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。

茂木 いっまでやる気？

田村 君も夜叉ヶ池を見に来たという。私がやっぱり、池を見ようと、この里に来た時、
暮六つの鐘が鳴ったんだ。弥太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があげたら池
まで案内させる約束で、小屋へ泊めてもらった処。

茂木 なあ。

田村 なに？ 今いいところやのに。

茂木 なあ、これどうする？ これ。前に魔女の芝居で使った扇風機。

茂木、扇風機を示す。

田村 これはまだ使えるからフリーマーケット行きやな。表に出しておいて、後で値段付けるから。

茂木 これ売れる？

田村 売れるよ。まだ動くんやから。

茂木 でもだいぶ型古いけど。

田村 今そういうレトロなんが流行りらしいよ、インテリアとして。

茂木 それよりリサイクルショップに来てもらった方が早いと思うけど。

田村 来てもらったよ、リサイクルショップ。

茂木 え？ いつ？

田村 昨日。

茂木 どうやった？

田村 処分したいんやったら逆にお金払わなあかんやつて。これはもうフリーマーケットに期待するしかない。

茂木 こんなガラクタ誰が買うの。

田村 前の道、案外人通り多いからいけるって。

茂木 朝から誰かお客さん来た？

田村 いや全然。

茂木 もう全部捨てたら。

田村 捨てるにもお金かかるねんで。

茂木 私が出すよ。

田村 あんたらには迷惑かけへんから。

茂木 いままでたっても片付かん方が迷惑やつて。ていうか、ちょっと休憩しよ。(隣の部屋に)倉貫さん。

女の声 はーい。

茂木 そっちどう？

女の声 もう終わりまーす。

茂木 休憩しよ。

女の声 はーい。

田村 モギモギ、コーヒー買って来てよ。

茂木 何で私が？

田村 ジャンケン。
茂木 ほい。

茂木が勝つ。

茂木 いつものやつな。
田村 畜生。

田村、立ち去る。

茂木 田村、変わってないなあ。相変わらず最初グーや。

マスクをした若い女(倉貫)がやって来る。

倉貫 これ今日中に終わりますかね？

茂木 どうやろうな。

倉貫 でも終わらさないと駄目なんでしょ？

茂木 そうやねん。明日には出て行かんとかかんみたい。

倉貫 ここ田村さんが出て行ったら取り壊しになるんですよね。もう他には誰も住んでないんですか？

茂木 みたい。私がいた時から住んでる人、少なかったな。だから稽古もできたんやけど。家賃幾らなんやろ？

茂木 二万らしい。

倉貫 二万？ この広さで？ 破格ですね。

茂木 私がいた時は五万やったんやけど。大家さんが何回か変わったみたいで。

倉貫 こんなこと言うたらあれなんですけど、何か出るん違います？

茂木 そんな噂もあったなあ。庭の梅の木の下に幽霊が出るとか。

倉貫 ええっ？

茂木 冗談。田村から聞いたんやけど、今の大家さんがいい人でだいぶ値引きしてくれてたんや。娘さんも芝居やっているとかで。

倉貫 なるほど。じゃあ余計に惜しいですね、取り壊しになるの。私も借りたかったなあ。え？

倉貫 私がもし劇団旗揚げするならこういう稽古場ほしいですね。

茂木 旗揚げするん？

倉貫 仮定の話で。

茂木 倉貫さん、今何回生？

倉貫 今四回です。

茂木 田村とは芝居したことある？

倉貫 ないです。

茂木 じゃあ何で片付け手伝ってるん？

倉貫 えーっと。

茂木 田村に何か言われた？ あんた後輩なんやから手伝いなさいって。

倉貫 私の方から手伝わさせてくださいって頼んだんです。いろいろ勉強したかったんで。

茂木 勉強？

倉貫 はい。

茂木 アトリエの片付け手伝っても勉強にやらんとと思うけどな。そうそう、もしよかったらこれ読んでみたら？

茂木、夜叉ヶ池の台本を渡す。

倉貫 何ですか？

茂木 夜叉ヶ池。

倉貫 泉鏡花ですか。

茂木 読んだことある？

倉貫 ないです。

茂木 昔、みんなで上演したことがあってな。それ読んだ方がよっぽど勉強になると思うよ。

倉貫 へー。

茂木 ていうか、私、お腹減ったんですけど。

倉貫 私もです。朝から飲まず食わずですからね。

茂木 田村が戻ってきたらファミマに何か買いに行こうよ。

田村、戻って来る。

田村 ちよっとちよっと、懐かしい人が来たよ。

スーツ姿の男(衛藤)がやって来る。

衛藤 ちわっす。

茂木 衛藤くん、どうしたん？

衛藤 アトリエの片付けやってるって聞いて陣中見舞いに。

茂木 わざわざ東京から？

衛藤 たまたまこっちに用事がありました。田村さん、これ差し入れです。

衛藤、差し入れを田村に渡す。

茂木 なになに？

田村 ビールやん。

茂木 しかもエビスやん。

衛藤 この稽古場には俺もお世話になったんで。

田村 そうやんな。

衛藤 はい。

田村 あ、紹介するわ。倉貫さん、私の大学の後輩。

衛藤 こんにちは。

倉貫 はじめまして。

田村 衛藤、うちの劇団の元看板俳優。

衛藤 俺看板俳優やったんですか？

田村 あれ？ 私はそのつもりやったんやけど。

衛藤 初めて知りましたよ。

田村 (茂木に)なあ？

茂木 いやいや、私でしょ。看板俳優は。

田村 今何やってるん？

衛藤 派遣会社で働いています。

田村 派遣会社？

茂木 おいおい、無視ですか。

衛藤 派遣されるんじゃないかって、する方で。

田村 忙しいの？

衛藤 ええまあ。

田村 お芝居はもうやってないの？ 東京で一旗揚げるって劇団辞めたのに。

衛藤 いやー、面目ないです。

茂木 なあ、せっかく衛藤くんがビール差し入れしてくれたことやし、ファミマに何か買

いに行かへん？

田村 いいね。(倉貫に)倉貫さんも行く？

倉貫 行きます。

衛藤 あれ？ ローソンじゃないですか？

田村 あのローソン潰れてん。

衛藤 ええっ？ あの思い出のローソンが？

田村 何か思い出あるん？

衛藤 ありますよ、めっちゃ台本コピーしたりとか。大した思い出じやないですね。行きましょか。

田村 行こう行こう。

などと言いながら四人立ち去る。

昼過ぎ。友佳里と恵のアパート。

友佳里が恭しく牡丹餅を乗せた皿を運んで来る。続いて恵と堀がやって来る。

堀 何が始まるんですか？

友佳里、ベランダの椅子の上に皿を置く。

堀 これは一体？

友佳里 お供え物です。

恵 こうやって神様の通り道に置いておくねん。

堀 神様の通り道？

友佳里 このアパートは丁字路に建ってるでしょ。古来より道が交錯する辻は、こちらとあちらの境界になっているんです。

恵 だからここ家賃安いねん。

堀 やっぱり何か出るんですか？

恵 これで後は和樹待ちやね。遅くない？

堀 そうですね。駅前の酒屋ならそう時間はかからないはずですけど。

友佳里 元はといえば恵が悪いんやろ。勝手に開けて飲んで。

恵 だって飲みたかったんやもん。

友佳里 恵はいつもそうやん。陽子さんもいうてたやろ、魔女たるもの、先の、先の、先まで考えて行動じないと。

恵 そうや、電話してみようっと。

友佳里 ちよっと、話がまだ途中やろ。

などと言いながら、恵と友佳里、隣の部屋に立ち去る。

堀 魔女の姉妹。やっぱいいいなあ。

沖田 すみません。

堀が驚いて振り返るペランダに、袖口をダンダラ模様染めた羽織の美少年が立っている。手には誘導棒(交通整理の時に使う棒状の電灯)。

沖田 こんにちは。お引越しですか？

堀 …はい。

沖田 お忙しいところすみません。

堀 いえ。…神様？

沖田 はい？

堀 神様ですか？

沖田 神様？

堀 神様ですよ！

沖田 いやいやいや、違います。町内見回り組です。

堀 町内見回り組？

沖田 はい、沖田と申します。

堀 沖田さん？

沖田 はい。最近何かと物騒ですので、こうやって見回りさせてもらってるんです。(誘導棒を竹刀に見立てて虚空に面を二度打つヤットウ、ヤットウ。それでね、ちょっといいですか？)

堀 はい。

沖田 今日の朝八時ごろなんですけど、その河川敷で通り魔があったんですよ。

堀 通り魔？

沖田 小学生がね、若い男に突然殴られたらしいんですよ。

堀 ええっ？

沖田 幸い大した怪我じゃなかったんですけど、犯人まだ捕まってないんで。何か心当たりありませんか？ 不審者を見かけたとか。

堀 いや、僕ずっとここで引越し手伝ってたんで。

沖田 そうですか。実はこの辺多いんですよ、こういう案件が。

堀 通り魔がですか？

沖田 通り魔とか痴漢とかね。だから私たちも何とかしないと思って、こうやって見回りさせてもらってるんですけど。

堀 はあ。

沖田 それじゃあまた。何かありましたら。

沖田、立ち去る。

堀 通り魔…。

入れ替わりに和樹が帰って来る。手には買い物袋。

和樹 ただいま。

堀 おかえりなさい。遅かったですね。

和樹 駅前の酒屋が閉まってて。それより今、見回り組が来てなかったか？

堀 来てましたけど。

和樹 あいつらあんまり相手にせん方がいいぞ。

堀 何ですか？

和樹 いわゆる町の自警団ってやつやねんけど、やり方が荒っぽくてな。評判悪いねん。

堀 そんな風には見えませんでしたけどね。

和樹 力で押さえつけても本当の解決にはならんのかな。

堀 どういう意味ですか？

和樹 合理性だけで人は生きていけへんってこと。これはある人の口癖やったんやけどな。

堀 男の魔女もいるって聞きましたけど。和樹さんもそうなんですか？

和樹 俺は違うよ。修行も途中でリタイヤしたし。

堀 そうなんですか。

和樹 魔女っていうのはどう考えても割に合わん生き方から。堀さんこそ何で？ 何であの二人と一緒にいるん？

堀 それ、聞きますか？ いや、よくぞ聞いてくれました。長くなりますけど、いいですか？ 実はですね、今から二週間前のことなんですけど、僕は絶望の淵に沈んでいたんです。といたしますのも、

和樹 ちょっと待って。

堀 はい？ 今いいところなんですけど。

カーテンが風に揺れる。

ベランダに、鬼面を被った何か(辻神)が現れる。牡丹餅を食べ始める。

和樹 来た。

堀 何がですか？

和樹 久しぶりに見たな。

堀 えっ？ えっ？

和樹 堀さん、あの二人呼んで来てくれるかな。

堀 あ、はい。

堀、友佳里と恵を連れて戻って来る。恵はお猪口を置いたお盆を持っている。

友佳里 和樹さん、神酒。

和樹 あいよ。

和樹、お酒の封を開ける。恵、部屋の中央にお盆を置く。

友佳里 後は私に任せて。

和樹 じゃあ俺らは隣で。

恵 お姉ちゃん、頑張つて。

堀 何ですか？ 何が始まるんですか？

恵 いいから。

友佳里を残し、三人は隣の部屋へ。

友佳里 あのう、一杯いかがですか？

辻神 むむっ。

牡丹餅を食べていた辻神、部屋に入って来る。お猪口を手にする。

友佳里、お酒を注ぐ。

辻神 かたじけない。

辻神、旨そうにお酒を飲み干す。

友佳里 気に入っていただけでしたか？

辻神 久しぶりの酒じゃ。しみいるのう。

友佳里 それはよかったです。

辻神 すまんがもう一杯。

友佳里 はい。

友佳里、辻神に酒を注ぐ。

辻神 (飲み干しながら)うまし、うまし。

友佳里 あの、お聞きしてもよろしいですか？

辻神 何じゃ。

友佳里 この辺りで祟ってらっしゃるのは貴方ですか？

辻神 いかにも。

友佳里 どうしてですか？

辻神 どうしても何も、先に約束を破ったのはそちらじゃ。

友佳里 約束？

辻神 渡り巫女と交わした約束じゃ。ここに留まり人心を惑わすのを止めよ。その代り宮を建て、わしを祀り、月に一度酒を振舞うと。

友佳里 その約束、もう一度お願いできませんか？

辻神 ぬしとか？

友佳里 はい、私と。

辻神 かまわんが、さすれば月に一度、ぬしの手で酒を振舞ってもらう。それでよいか？

友佳里 かまいません。

辻神 ほう、話が早い。しかし何故じゃ。

辻神、友佳里に近づき匂いを嗅ぐ。

辻神 そうか、ぬしはあの渡り巫女の縁者か。

友佳里 はい、弟子の一人です。

辻神 よかろう。そこに梅の木がある。その根元に石が埋まっているはずじゃ。宮を建てて祀れ、よいな。この約束、ゆめゆめ忘れるでないぞ。

辻神、お酒を飲みながらぴよこぴよことベランダの方へ。

辻神 うまーし、うまし。うまーし、うまし。うまーし、うまし…。

辻神、立ち去る。

恵と和樹と堀が戻って来る。

恵 行った？

友佳里 行った。

恵 話あった？

友佳里 契約成立。

恵 やったやん。さすがお姉ちゃん。

友佳里、頭痛がする。

恵 お姉ちゃん？

友佳里 大丈夫。でもちょっと疲れたかも。

恵 無理させてごめん。私にも出来たらいいんやけど。

友佳里 いいの、こういうのは私向きやから。

堀 あ、何が起こったんですか？ 何か来てたんですか？

恵 辻神。

堀 辻神？

和樹 土着の神。神というよりは魔物に近い。長い間、ちゃんと祀られてなかったから、

この辺りで祟ってみたいやな。

堀 祟ってたって？

和樹 災いを呼び、人心を惑わす。

友佳里、どんどん頭痛が激しくなる。

恵 お姉ちゃん、大丈夫？

友佳里 うん、ちょっと気分が悪いだけ。

恵 あてられたんとちがう？

友佳里 たぶん。

恵 あっちで横になったら？

友佳里 うん、そうする。

友佳里、隣の部屋へ。

堀 友佳里さん、大丈夫ですか？

恵 私がついてるから。二人にして。

堀 はい。

恵も隣の部屋へ。

堀 友佳里さん、急にどうしたんですか？

和樹 ああいう類に絡むとかなり消耗するから。災いを一人で引き受けるようなもんやからな。最悪、命を落とすこともある。

堀 ええっ？ 大丈夫なんですか？

和樹 まあ大丈夫やろ。昔もあったから、こういうことが。

堀 こういうことって？

和樹 俺の母親も似たようなことしてたから。

堀 もしかして、陽子さんって方ですか？

和樹 知ってるん？

堀 二人の師匠やった人やって。事故で、亡くなられたって。

和樹 事故か。

堀 違うんですか？

和樹 まあ事故みたいなもんかな。昔、この辺りでホームレス狩りっていうのが流行って

てな。それを止めようとして。

堀 …。

和樹 あはやでほんまに。誰に頼まれたわけでもないのに人助けするって、聞こえはいい

けど、ただの自己満足やる。あの二人には同じ道を歩んでほしくなかったんやけどな。

堀 自己満足じゃないですよ。現に僕は救われましたから。二週間前の話なんですけど、僕は絶望の淵にあったんです。というのは、

恵が戻って来る。

恵 どうしよう。お姉ちゃん凄いい熱があるんやけど。

和樹 思ったより深刻かもな。

恵 どうしよう。こういう時、陽子さんはどうしてた？

和樹 こういう時は、クサスギヨモギとカノコソウかな。ある？

恵 ある。

和樹 俺も手伝うわ。

堀 僕にも何か手伝わせてください。

三人、隣の部屋に立ち去る。

昼過ぎ。市頭と玉乃のアパート。カーテンは閉じられている。

玄関のチャイムが鳴る。隣の部屋から市頭がやって来る。

ドアを叩く音。

塚井声 俺です。開けてください。

市頭 はいはい。

市頭、玄関へ。

塚井声 何してたんですか、早く開けてくださいよ。

市頭声 悪い、洗濯してた。

塚井声 何してるんですか、こんな大事な時に。

市頭声 いいから早く入れ。

市頭、戻って来る。

塚井、アイマスクをした中年の女(岡本)の手を引いてやって来る。

市頭 お前こそ、何やこれ。

塚井 だって場所が割れたら後々やっかいでしょ。

市頭 そやけど。

塚井 これ被ってください。

塚井、プロレスのマスクを市頭に渡す。

市頭 何やこれ。

塚井 ドンキで買ってきました。面が割れたら後々やっかいでしょ。

市頭 そやけど、もっとまともな用意しろや。

市頭、マスクを被る。塚井も被る。

塚井 準備はいいですか？

市頭 おう。

塚井 (岡本に)アイマスク、取りますよ。

岡本 はい。

塚本、岡本のアイマスクを取ってやる。岡本、二人の風貌に少し驚く。

塚井 すんませんな。いろいろ事情があって、場所や顔は明かせへんのですわ。

岡本 いえ、Vシネみたいでドキドキしました。

塚本 そうですか。まあ俺らもVシネ参考にしてますんで。

市頭 余計なこと言わんでええねん。

塚本 へい。

市頭 岡本さんでしたっけ。

岡本 はい。
市頭 金は持ってきたんか？
岡本 はい、ここに。
市頭 出してもらおか。
岡本 はい。

岡本、鞆からお金の入った封筒を取り出し、市頭に渡す。
市頭、その封筒を塚井に渡す。

市頭 数えろ。
塚井 へい。

塚井、札束を数え始める。

岡本 あの。
市頭 何や。
岡本 ブツを、見せてもらってもいいですか？
市頭 ええやろ。

市頭、隣の部屋へ。塚井は、札束を数えている。

岡本 何かドキドキしますね。
塚井 …。
岡本 こういう仕事って儲かるんですか？

塚井、どこまで数えたかわからなくなる。最初から数えなおす。

岡本 儲かるんでしょうね。
塚井 …。
岡本 ハイリスクハイリターンですもんね。
塚井 (またわからなくなり)あのことと静かにしてもらえまへんか。数えてるんで。
岡本 はい、すみません。

市頭、薄汚い鞆を持って戻って来る。鞆の中から紙で包まれた拳銃を取り出す。

市頭 これや。

岡本 うわ、凄いい、本物ですよ？
市頭 当たり前や。

岡本 (手に取って)重いんですね。
市頭 そうや。

岡本 何て銃なんですか？

市頭 トカレフ。

岡本 あ、聞いたことあります。ヤクザとかがよく使うロシアの銃ですよ。

市頭 これは中国製やけどな。

岡本 中国製？

市頭 日本に入って来るトカレフはほとんどが中国製やねん。向こうでライセンスとって製造しとるから。まあ性能に間違いはない。

市頭、手を出す。

岡本 そうですか。わかりました。

岡本、拳銃を市頭に返す。

市頭 (鞆を示して)弾はここに二十発入ってる。何に使うんかしらんだけど十分やろ。

岡本 はい。

塚井 あの。

市頭 何や。

塚井、金を数え終わった様子。

塚井 五万、足りないんですけど。

市頭と塚井、岡本を見る。

岡本 実は、あっちこっちから借金して集めたんですけど、どうしても五万円、足りなかつたんです。

市頭 で？

岡本 いろいろインターネットで調べたんですけど。トカレフで八十万つて相場より高いと思うんです。それにこれ中国製とかいってましたけど、密造品でしょ。密造品は粗悪品が多くて暴発することもあるって聞きましたけど。

市頭 …おばはん、ええ度胸しとんな。

岡本　お願いします。これだけしかないんです。ほんと。
塚井　どうします？

市頭　…もうええわ、持っつけ。
岡本　ありがとうございます。

塚井　いいんですか？
市頭　駅まで送ったれ。

塚井　へい。じゃあまたこれ付けてくれるかな。
岡本　はい。

岡本、アイマスクを付ける。

塚井　じゃあ行きましょか。

岡本　あの、私ね、これで旦那を殺そうと思ってるんですよ。
市頭　…。

岡本　あの人、昔空手とかやってて、銃でもないし殺せそうにないから。
市頭　何でまた？　浮気でもされたんか？

岡本　はい、興信所に頼んで調べてもらったんです。私の留守中に女連れ込んで。私がパートで働いてる間に、信じられないでしょ。

市頭　…。
岡本　それで今度、パートに行くふりして現場押えたらうて思ってるんですよ。旦那と、

市頭　ついでにその女もぶっ殺したろうと思ってるんですけどね。
岡本　岡本さん、銃は撃ったことあるんか？

市頭　あります。新婚旅行でハワイに行った時に。私、旦那より筋がいいって、インスタクターの人に褒められたんですよ。

市頭　じゃあまあ、大丈夫かな。頑張っ
て。
岡本　はい。

市頭　送ってさしあげろ。
塚井　へい。

玄関のチャイムが鳴る。

市頭　嘘やろ、いつもより早いやん。
塚井　マジっすっか、どうしましょ？

市頭、玄関へ。

岡本 どうしたんですか？ 何か問題でも？

塚井 いえ、ご心配なく。

市頭声 裏山の犬にでも。

玉乃声 喰われる。

市頭声 あのさあ、今取り込み中やねんか。

玉乃声 はあ？

市頭声 いやだから取り込み中やから。小二時間してから戻ってきてくれへん？

玉乃声 何言うてるの？

市頭声 ちよちよちよ。

玉乃声 どいて。

市頭声 あかんで、あかんで、ほんまあかんから。

玉乃、部屋に入ってくる。そこには塚井と目隠しされた岡本。

玉乃 何これ？ 塚井さん？

塚井 あ、(唇に指をあてて)しーっ、しーっ。

玉乃 誰この人？ 何で目隠し？ どういうこと？ もしかして、誘拐？

塚井 違います。これは俺の(小指を立てて)これですよ。

玉乃 塚井さんの？

塚井 だから名前呼ばないで。

玉乃 じゃあ虐待？ DV？ ドメスティックバイオレス？

玉乃、鞆から警棒を取り出して構える。

塚井 うわっ、ちよっと市頭さん何とか言ってくださいよ。

市頭 馬鹿野郎、お前俺の名前、ふざけるなよ。

塚井 あ。

市頭 お前今の絶対わざとやろ。

塚井 違いますって。

岡本 あの、どうなってるんですか？ これとっていいですか？

市頭 駄目、取ったら絶対に駄目。

岡本 はい。

市頭 ちやうねん、これはこういうプレイやねん。

玉乃 プレイ？

市頭 なあ。

塚井 そうそう。

市頭 もう、このド変態。
塚井 すみませんほんと。
市頭 じゃあもう帰って。家でやって。
塚井 はい。(岡本に行くぞ。
岡本 あ、はい。

塚井と岡本、立ち去る。

玉乃 何なん？ 何してたん？
市頭 いや、その、ちょっとした、ビジネスってやつ？
玉乃 私の部屋、変なことに使わんといってくれる？
市頭 すみません。
玉乃 何その封筒？
市頭 これな、臨時収入、寿司でもとるか？
玉乃 売れたんや。あの鞆の中身。
市頭 ああ、うん。
玉乃 よかったな。これでここから出て行けるやん。
市頭 いやそういうわけじゃ。
玉乃 もう勉強したくないこと、勉強せんでもいいやん。
市頭 そんな言い方するなよ。
玉乃 じゃあ課題図書は読んだ？ 強制的異性愛とレズビアン存在
市頭 読んでない。
玉乃 ほら。
市頭 …。

ベランダから洗濯機のアラーム音がする。

玉乃 洗濯してたん？
市頭 ああ、うん。
玉乃 お洒落着は洗濯ネットに入れた？
市頭 入れた。
玉乃 エメール使った？
市頭 使った。
玉乃 ふーん、やれば出来るやん。徐々にやけど進歩はしてるな。

玉乃、洗濯機のあるベランダへ去る。

市頭　　いうたやろ、俺はやれば出来る男やぞ。

市頭も後を追う。

昼過ぎ。片付け中の劇団のアトリエ。

男の声　あのー、すみませーん。

眼鏡の男が、恐る恐る部屋に入って来る。扇風機を抱えている。

眼鏡男　すみませーん。

倉貫がやって来る。

倉貫　はい、何ですか？

眼鏡男　表の看板見たんですけど。フリーマーケットやってらっしゃるんですよ？

倉貫　はい。

眼鏡男　これ、お幾らですか？

倉貫　ええっ？

眼鏡男　これも売り物ですよ？

倉貫　はい、たぶん。

眼鏡男　これだけ値札ついてないんですけど。

倉貫　えーっと、ちょっと待ってくださいね。田村さん、田村さん。

田村、やって来る。

田村　なに？

倉貫　フリーマーケットにお客さんですよ。

田村　ええっ？　うそ？　あ、はい。

眼鏡男　すみません、これだけ値札ついてないんですけど。

田村　あれ？　あー、付け忘れてました。

眼鏡男　お幾らですか？　実は僕、インテリア関係の仕事してまして、そういうちょっと古

めの家電を集めてるんですよ。

田村 あー、そうなんですか。はいはい。
眼鏡男 是非、譲っていただけませんか？

田村 あ、はい。

眼鏡男 で、(財布を出して)お幾らですか？

田村 えーっと、一万、二千元です。

倉貫 ええっ？

眼鏡男 そっかー、まあまあしますね。うーん、どうしようかなあ。

倉貫 (小声で)ちよっと田村さん。

田村 (小声で)なに？

倉貫 (小声で) 一万二千元って。

眼鏡男 あの、これ何時頃までやってますか？ フリーマーケット。

田村 夜までやってますよ。

眼鏡男 そうですか。すみません。ありがとうございました。

眼鏡男、立ち去る。

田村 …惜しかったなあ。

倉貫 どこですか？

茂木がやって来る。手には紙袋。

茂木 今、誰か来てなかった？

倉貫 ちよっと聞いてくださいよ、フリーマーケットにお客さん来てたんですよ。

茂木 うそ？

田村 この扇風機欲しいって人が。

茂木 これを？ まじで？

倉貫 それで、これ値札付いてなかったんですよ。で、お客さんが幾らかって田村さんに聞いたんですけど、田村さん 一万二千元とか言うんですよ。

茂木 はあ？

田村 惜しかった。もう少しでレンタカー代諸々出たのに。

倉貫 値段聞いて速攻で帰りました、その人。

茂木 ふっかけるにも程があると思うけど。

田村 ちやうねん、めっちゃ買いそうな雰囲気やってん。

茂木 でもこれに 一万二千元は。

倉貫 田村さん、欲張り過ぎですよ。

倉貫、呆れながら隣の部屋に立ち去る。

茂木 こんなガラクタ、ただであけても良かったのに。

田村 (茂木の持つっている紙袋に気づいて) その紙袋は何？

茂木 え、ああ、花火。

田村 花火？

茂木 旗揚げ公演の時に小道具で使ったん覚えてない？

田村 そんなまだ残ってたんや。

茂木 後でみんなでやろうよ。

田村 何で？

茂木 記念に。

田村 何の記念なん？

男の声 すみませーん。

茂木 ちよっと。

田村 またお客さんかな。はい。

袖口をダンダラ模様染めた羽織の美少年がやって来る。手には誘導棒。

沖田 こんにちは。

茂木、驚く。

沖田 これ、今何されてるんですか？

茂木 え？ えーっと。

沖田 表の看板にフリーマーケットって書いてましたけど。

茂木 そうなんですか。

沖田 そうですか。お忙しいところすみません。

茂木 いえ。

沖田 申し遅れました。私、町内見回り組の沖田という者です。

茂木 町内見回り組？

田村 この辺りの自警団。

沖田 はい、最近何かと物騒なので、こうやって見回りさせてもらってるんですよ。(誘導棒を竹刀に見立てて虚空に面を二度打つ) ヤットウ、ヤットウ。それでね、ちよっといいですか？

茂木 はい。

沖田 最近この付近で猥褻事件が頻発してまして。

茂木 猥褻事件？

沖田 露出狂です。

茂木 露出狂？

沖田 はい、何か心当たりありませんか？ 不審者を見かけたとか。

茂木 いやー、（田村に）ある？

田村 ない。

沖田 そうですか。この辺り多いんですよ。露出狂が。だから私らも何とかしないとって、こうやって見回りさせて頂いてるんですけどね。

茂木 はあ。

沖田 それじゃあまた、何かありましたら。

茂木 あ、はい。

沖田、立ち去ろうとする。

田村 まあ、ある意味私も露出狂みたいなもんかな。

沖田 は？

茂木 ちよつとちよつと。

沖田 どういう意味ですか？

田村 例えですよ例え。

沖田 例え？

田村 比喻です比喻。

沖田 比喻？

茂木 いやいや冗談ですよ冗談、なあ？

田村 冗談と言えば冗談かな。

沖田 はあ。じゃあ。

茂木 はい、ご苦労様です。

沖田、立ち去る。

茂木 田村、何で、どうしたん？

田村、扇風機を抱える。

田村

だって私たちのやってた演劇って隠しておくべきことをさらけ出す演劇やねんから、露出狂みたいなもんかなって、思ったから。

田村、立ち去る。

入れ違いに衛藤が荷物を運んで来る。

衛藤 誰か来てませんでした？

茂木 来てたけど、説明するのが面倒臭い。

衛藤 モギモギさん、相変わらずですね。

衛藤、荷物を置いて。

衛藤 だから意外やったんですよね。モギモギさんが片付け手伝いに来てるのが。

茂木 何で？

衛藤 だって一番面倒臭がりじゃないですか。タタキとかDM作業とか、全然来なかつたでしょ。

茂木 そやな。だからほら。

茂木、手を見せる。バンドエイドが貼ってある。

茂木 慣れんことしたからマメが出来た。バラシてない装置がいつぱいあつてな。

衛藤 すみません。俺こそ手伝いに来れなくて。

茂木 いいよ、衛藤くん東京やし。

衛藤 全部三人で片づけたんですか？

茂木 そやで。

衛藤 他のみんなは？

茂木 何かみんな忙しいらしいよ。

衛藤 そうですか。

茂木 まあしやーないってか。

衛藤 (運んできた荷物について)これトラックですか？

茂木 いや、それは田村の私物やで。

衛藤 じゃあ田村さん、ここに住んでるって本当なんですか？ いつからですか？

茂木 この前の公演からやいうてたから、二年前かな。

衛藤 お風呂とかどうしてたんですかね？

茂木 そこに水オンスリーの流し台あるやんか。

衛藤 女捨ててますね。

茂木 やろ。ヤバイやろ。

衛藤 でも、ここ取り壊しになったらどうするでしょ。

茂木 いったん実家帰るって。

衛藤 お芝居、辞めるんですか？

茂木 お金が貯まったら戻って来るって言ってたけど。実は私な、田村のために新しいアトリエ探してきたんやんか。

衛藤 は？

茂木 ここよりは家賃高いんやけど、結構いい所があつて。風呂トイレ付やからここと同じように住もうと思つた住めるし、家賃は私がしばらく立て替えてもいいよーって言うたんやけど。

衛藤 断られたでしょ。

茂木 つーか、気持ち悪がられた。重いって。

衛藤 そらそうですよ。

茂木 でも今の田村見てるとつらいねんな。私にとって田村はもつとき。

衛藤 気持はわかりますけど、勝手な言い分ですよね。

茂木 そやな。

衛藤 俺らにはそういうこと言う資格ないですよ。

茂木 相変わらずサバサバしてるな。衛藤くんこそ何で手伝いに来たん？ 私的には衛藤

くんが手伝いに来なさそうな奴ナンバーワンやつたんやけど。

衛藤 失礼ですね。

茂木 …なあ、ほんまは何のためにきたん？

衛藤 え？

田村が戻って来る。パナマ帽を被っている。

田村 何、何かもめてるの？

衛藤 いえ、何でもないです。

茂木 捨てるもの全部積んだ？

田村 まだ。

茂木 まだあるの？

茂木、立ち去る。

衛藤 (さっきの荷物を示して)これ、田村さんの私物ですか？

田村 そうそう、今日中にまとめて実家に送らんな。

衛藤 何ですか？ その帽子。

田村 覚えてない？ 夜叉ヶ池。

衛藤 覚えてますよ。モギモギさんの被ってた帽子でしょ。

田村 そうそう。

衛藤 藪から坊主。

田村 如何にも、本願寺派の坊主で、そして文学士、京都大学教授じや。山沢学円というものです。

衛藤 懐かしいですね。

田村 懐かしいやろ。

衛藤 台詞覚えるのに苦労しました。

田村 最後の公演やんな。一緒にやった。

衛藤 そうですね。(台詞を思い出して)山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たという。私がやっぱり、池を見ようと、この里に来た時、暮六つの鐘が鳴ったんだ。弥太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があげたら池まです案内させる約束で、小屋へ泊めてもらった処。

田村 よく覚えてるなあ。

衛藤 その夜、丑満の鐘を聞いて、鐘楼の高い段から下りると、爺は、この縁前で打倒れた。急病だ。死ぬ苦悩をしながら、死切れないといって、悶える。こうした世間だ、既う以前から、村一統鐘の信心が消えている。爺が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、田地田畠、陸は水になる、沼になる、淵になる。幾万、何千の人の命。それを思うと死ぬるも死切れぬと、呻吟いて搔く。虫より細い声だけれども、五十年の明暮を、一生懸命、そうした信仰で鐘楼を守り通した、骨と皮ばかりの爺がいうのだ。鐘の自から鳴るが如く、僕の耳に響いた。かつは臨終の苦患の可哀れさに、安心をさせようと、心配するな親仁、鐘は俺が撞いて遣る、とはつきりいうと、世にも嬉しそうに、ニヤニヤと笑って、拝みながら死んだ。その時の顔を今に忘れん…。

田村 …何で？ 何で覚えてるん？

衛藤 何ですかね。

田村 まさか稽古してたとか？

衛藤 してませんよ。覚えてるのはここだけです。すごく印象的やったんで。

田村 ふーん。

衛藤 田村さん。

田村 なに？

衛藤 次回公演の予定とかないんですか？

田村 ないよ。

衛藤 そうですか。

田村 さすがに一人はきついよ。衛藤君、もし頼んだら出演してくれる？

衛藤 僕は、もう、無理ですよ。

田村 そうやんな。

衛藤 はい、すみません。

田村 今のところ予定はないけど考えてる作品があって、衛藤君にぴったりの役があるんやけどなあ。

衛藤 どんなのですか？

田村 まだ構想中なんやけど。

衛藤 聞かせてくださいよ。

田村 ある劇団が解散する話。学生劇団で仲のよかった連中が劇団を旗揚げするんやけど、月日は流れ、劇団員が一人減り、二人減り、最後は代表やった作演出一人になってしまふ。で、みんなでお金出しあつて借りてた稽古場も、引き払うことになつて、そいつが一人で稽古場の片付けしてるんやけど、辞めて長い間連絡の無かつた元劇団員たちが、ひよっこ手伝いに来てくれるねん。それであんな芝居したなあ、こんな芝居したなあつて昔話に花を咲かせるんやけど、実はそれは全部幻で、結局片付けてるのは一人やったつて話……。どう？ その劇団が過去に上演した作品を入れ子式に組み込んで、夜叉ヶ池なんかも引用してみたら面白くなりそうじゃない？ …じゃあ今の僕は田村さんの見てる幻なんですか？
どっちやろうな。

田村

衛藤

夕方。とあるの市立少年少女会館の和室。

スーツ姿の男(小川)とカジ ュアルな服装の男(財前)がやって来る。

小川 ここでちょっと待っててくれるかな。

財前 いいけど。

小川 あの人も、もう出ると思うし。

財前 もう六時やけど。

小川 そうやねんけど。

財前 午後の部は五時までやろ。何なん？ 何の団体？

小川 うーん、ちょっとした政治団体。いろいろあつてな。

財前 公立劇場の職員も大変やな。次の時間空いてるんやったらここでやつてもいいけど。

小川 いや、そこまですなくても大丈夫。会議室の方がやりやすいやろ？

財前 それはそうやけど。

小川 それより脚本の方はどうなん？ 進んでる？

財前 うーん、それがなあ。

小川 頼むぞ。出演者も決まってる、もう稽古はじまつてるんやからな。これ以上、脚本が

遅れるようやったらリーディング公演にするかもしれないって演出の月橋さんが。

財前 市民参加演劇で出演者募集してるのにリーディング公演はまずいな。
小川 だからやん。書けそうな生徒、一人くらいおらんの？

財前 そうそう、一人面白い子がおってな。乾君って子なんやけど。

小川 ああ、乾君ね、そういえば応募用紙にも面白いこと書いてたな、前世が犬とか。
財前 それがな、めっちゃ可愛いねんな。

小川 え？

財前 子犬みたいに可愛いねん。

財前 何かお前、ときめいてないか？

財前 ときめいてないよ。書いてくるものもなかなか面白い。

小川 おう。

財前 内容は荒唐無稽なファンタジーなんやけど、自分と切り離れたところで何かを書いている気がする。あの子の中に別の人間がいるみたい。

小川 へー。

財前 でも何より、笑顔が子犬みたいで可愛いねんな。

小川 あの子、財前、わかっているとと思うけど、手出すなよ。

財前 おいおい、勘違いすんなよ。俺の可愛いは、そういう可愛いじゃなくて、育てたいっていうか、見守りたいっていうか、そういう可愛いやねん。

小川 何か問題が起こったら俺の責任なんやからな。お前を講師に推薦したのは俺なんやからな。

財前 わかっている。お前の期待は裏切らへんよ。

小川 頼むぞ。

そこへ二人の若い女(倉貫と根本)がやって来る。

倉貫 あの。

小川 はい。

倉貫 今日は和室なんですか？ 会議室Aって聞いてたんですけど。

小川 会議室Aなんやけど、前の団体がまだ使ってた。

倉貫 何ですか？ もう六時やんな。

根本 うん、もう六時。

倉貫 午後の部は五時までですよ。

小川 そうやねんけど長引いてるみたいで、ちょっと見て来るんで、それまでここで待っててください。

倉貫 はい。

根本 はい。

小川、立ち去る。

財前 まあ、そういうこと。

倉貫 あれ？ 乾君は？

財前 まだ来てないみたい。

倉貫 そうですか。あの、これ書いてきました。

根本 私も。

倉貫と根本、脚本を財前に提出する。財前、さっそく目を通し始める。
倉貫と根本、適当な場所に座る。

倉貫 書けた？

根本 うーん、とにかく台詞とト書きで埋めてきたって感じ。

倉貫 難しいよな。

根本 難しい。

倉貫 私、共同製作とか初めてやから。

根本 私も。

倉貫 (鞆からレポートを出しながら) だいたい、基本のプロットがさ、自分で考えたアイディアやったらもっとスラスラ書けるんやけど。

根本 それ何？

倉貫 魔女狩りについて調べてきてん。参考になるかなって思って。

根本 へー。

倉貫 魔女ってそもそも、土着の神を信仰する、シャーマンていうか、民間療法師の女の人が多かったらしいんやけど、中世ヨーロッパではキリスト教的な価値観が広まる過程で、そういう人らは異教徒として弾圧されたんやって。

根本 弾圧？

倉貫 やっぱ拷問とかもあったらしいよ。

根本 拷問？ ちょっとそそられるかも。私にも読ませて。

倉貫 ああ、うん。

根本、熱心にレポートを読み始める。

倉貫 でもそのせいで疫病が蔓延したり、昔から伝わってた伝承とか、貴重な文化的なものが沢山失われたんやって。

財前 根本さん。

根本 はーい。

財前 根本さんの書いて来てくれたところ、今日を通して疑問点があるんやけど。
根本 はい。

財前 この沖田総司って登場人物。誰かな？ いきなり出てきたんやけど。

根本 沖田総司は新撰組一番隊の隊長ですけど。

財前 いやだから、こんな登場人物いなかったよね、プロットに。

根本 はい、私が作りました。新キャラクターです。

財前 あのさ、勝手に登場人物増やしたらあかんって言わなかった？

根本 えー、何ですか？ 私なりに考えたんですよ。この脚本に足りないもの、それは

ズバリ、美少年的な何かではないかと。

財前 やり直し。

根本 はい。

財前、根本に脚本を返却する。

財前 倉貫さん。

倉貫 はい。

財前 倉貫さんが書いてきた、このアトリエの片付けをしてる劇団のシーン。

倉貫 はい。

財前 これ以上、語り手を増やすのはいかなものかと。

倉貫 一応この乾君の考えたプロットに則してみたんですけど。

財前 どういうこと？

倉貫 このお芝居のキーワードは魔女じゃないですか。だから魔女の信仰、つまり多神教的考え方に重ねてみたんですけど。

財前 うーん、そこは重なるのかもしれないけど、複雑すぎるし、この企画にはミスマッチというか、だいたいこういうパターンは案外誰でも思いつく、使い古された手法ってことをもっと自覚してほしい。書き直し。

倉貫 …はい。

財前、倉貫に脚本を返却する。

そこへ若い男(乾)がやって来る。

乾 あの、おはようございます。遅れてすみません。

財前 おはよう、乾君。今ちょっと前の団体がおしてるみたいやねん。

乾 はい、それで小川さんが会議室空いたから、みんな呼んで来てって。

財前 じゃあ移動しましょか。

根本 はい。

乾

あと財前さん。実は今日までに書いてくるように言われてた、クーデターに失敗したヤクザのシーン、書けなかったんですよ。すみません。

財前

そっか、まあしやーない、書けへん時もある。時間があっても書けるとは限らんかな。それが難しいところやな。でもな、もう少し詳しく話聞かせてくれるかな、何か理由があって行き詰ってるはずやねん。

などと言いながら乾と財前、立ち去る。

倉貫

…何あれ、何なんあれ、おかしくない？

根本

おかしい。

倉貫

私らとの時と態度違いすぎひん？

根本

違いすぎる。うふふ。

倉貫

おかしいよ。何で？　こんなんエコ最良もいいとこやん。

根本

倉貫さん。教えてあげよか。

倉貫

なにを？

根本

何で乾君が最良にされるのか。

倉貫

何で？　教えてや。

根本

それはな、あの二人がな、ラブラブやからやねん。

倉貫

はあ？

根本

間違いない。私そういう匂いには敏感やねん。基本は財前さんの俺様攻め、乾君の健気受けなんやけど、逆に、乾君のやんちゃ攻め、財前さんの強気受けもありかなあと。でも驚くのはまだ早いよ。私の睨んだところによると、小川さんも一枚噛んでるね。

倉貫

どういうこと？

根本

小川さん、財前さんと同じ大学やったんやろ？　昔何かあったな、あの二人。たぶんつき合ってたよ。で、一回別れたんやけど、小川さんが財前さんに未練たらたらで、たぶんこのワークシヨップの仕事持ってきてん。これをきっかけにもう一度財前さんを自分のものにしようとする策略やね。ああ、財前さん危うし。カップリング的には、小川さんの腹黒ドS攻め、財前さんの訳あり強気受けやね。でも今、財前さんは乾君に夢中やから、三角関係か。これは大変なことになってきましたよ。

そこへ小川がやって来る。

小川

あれ？　何してるの？　会議室もう空いたよ。

倉貫

はい。もう行きます。あほなこと言うたらんて行くで。

根本

はーい。小川さん。

小川 なに？

根本 小川さんと財前さんって同級生やったんですよね。

小川 ああ、うん、大学でな。

根本 同じサークルやったんですよね。

小川 うん。

根本 合宿とか一緒に行ったんですか？

小川 行ったよ。

根本 ひとつ屋根の下に泊まったんですか？

小川 え？

根本 どうなんですか？

小川 泊まったけど。

根本 そうですか。うふふ。

小川 うふふ？

根本 ひとつ屋根の下。うふふ。

根本、立ち去る。

小川 根本さん、どうしたん？

倉貫 気にしない方がいいですよ。

夜。ベランダのある畳の部屋。マンションの五階。倉貫と乾が同棲している部屋。
倉貫が帰って来る。

倉貫 ただいまー。

返事はない。

倉貫 ただいまー。

乾がスマホをいじりながらやって来る。手にはノートとペン。

乾 お帰り。

倉貫 何してたん？

乾 脚本の続き考えてた。

倉貫 ふーん、熱心やね。

乾 うん、期待されてるからさ。

倉貫 は？

乾 ほら、俺期待されてるから。財前さんに。

倉貫 あらそう。よかったね。洗濯、しといてくれた？

乾 …。

倉貫 なあちよっと、聞いているの？

乾 いや、してない。

倉貫 何で？ 今日乾君の当番の日やろ？

乾 ごめん。忙しくて。

倉貫 何が忙しいの？ バイトもしてないのに。

乾 (ノートを示して) これがあるから。

倉貫 そろそろ仕事探したら？ ここの家賃もずっと私が一人で払ってるんやけど。

乾 これが終わったら探すよ。それまでは専念させてくれ。

倉貫 何それ。何でそうなるん？ もともとは乾君はオマケやったよね。

乾 オマケって言い方はひどくない？

倉貫 だってそうやん。別に乾君はお芝居やってないやん。私が参加するから便乗してき

乾 ただけやん。

乾 だって暇やったからさ。

倉貫 こんなことになるなら誘うんじやなかった。

乾 今更そんなこと言われても。

倉貫 何で？ 何でこんなことになってしまったんやろ？

乾 うーん、それはさ、やっぱり俺の才能が開花してしまったからちやうかな。

倉貫 はあ？

乾 財前さんに気に入られてしまってるからなあ。ま、心配せんでも、最終的にはお前

の顔は立てるからさ。

倉貫 腹立つ。あのさ、何であんたが財前さんに気に入られてるか知ってる？

乾 だから俺の才能に惚れこんでるからちがうの。

倉貫 ハハハハ。

乾 何やねんハハハハって。

倉貫 教えてあげよか。

乾 なに？

倉貫、乾に耳打ち。

乾 ええっ？

倉貫 心当たりない？

乾 ある。ありまくる。いや、何か距離近いなあって思ってたんやけど。

倉貫 だからあんたばかり鼻肩にされてるねん。めっちゃ感じ悪いわ。根本さんなんかすごいよ。あの子の中で、あんたと財前さんはラブラブらしいから。ちなみに財前さんが攻めで、あんたが受けな。

乾 何やねん受けて。

倉貫 根本さんに聞いてみたら。

乾 ちょっと待ってくれ、でもさ、だからって俺の才能が否定されるのはおかしくない？

倉貫 は？

乾 だから、多少財前さんに下心があったとしても、あの中で比べたら、悪いけど俺のプロットが一番よく出来てたのは否めへんやろ。

倉貫 何を言い出すのかと思ったら。あんたのそのプロット、あんたが考えてないやん。ラインで人から相談されたこと書いてるだけやん。

乾 もしかして、見たんか？

倉貫 何なんその人、自分のこと魔女とか、頭おかしいんちがう？

乾 お前な、人のスマホ勝手に見るなよ。

倉貫 ほんま気持ち悪い。もうそんな人とラインするのやめたら。ブロックしいや。嫌や。

倉貫 何で？

乾 今大事なことやねん。いろいろ相談にのってるから。妹さんのこととか。友佳里さん、今病気で寝込んで動かれへんから、心配やねんて。

倉貫 信じてるわけ？ その人の話。

乾 信じてるわけじゃないけど、この後どうなるか気になるやん。

倉貫 スマホかして、私が消してあげるから。

乾 ちょっと、何すんねん。

揉み合いになる。

倉貫 かして、かきなさい。

乾 ちょっと、やめろ、やめろって！

倉貫、派手に転ぶ。

倉貫 痛。いったー。

乾 あ、ごめん。

倉貫 ちよっと何するん？

乾 大丈夫？

倉貫 ちよっと触らんといて。

乾 わざとちやうし。お前がスマホとろうとするからやんけ。

倉貫 何それ、最悪、もう死んだら？

倉貫、鞆をひつつかんで玄関へ。

乾 どこ行くん？

倉貫、立ち去る。

乾 おい、ちよっと待てよ。

乾、追いかけてよとする。

友佳里 乾君。

乾 え？

ベランダに友佳里が立っている。

乾 友佳里さん？

友佳里 今、ちよっといい？

乾 病気で寝込んでるんじゃないんですか？ ていうかどこから入ってきたん？

友佳里 ここから。

乾 ここからって、ここ、五階ですよ。

友佳里 細かいことは気にせんといて。

乾 気にしますよ。

友佳里 私今アストラル体やから。

乾 アストラル体？

友佳里 まあ幽霊みたいなもんかな。

乾 幽霊？ またまたー、冗談きついつて。

友佳里 ごめん、もうちよっと時間ないから聞いて。

乾 はい。

友佳里 あの子を止めてほしいねん。

乾 あの子って恵さん？

友佳里 そう。

乾 でもあの話、冗談やんな。

友佳里 冗談じゃないの、本当のことやの。

乾 ええっ？

友佳里 恵のやろうとしてることは魔女の生き方に反してる。そんなこと誰も望んでないの
に。

乾 ちよっと話が見えないんやけど。とりあえずそんなところに立ってないで、中に入
って。ゆっくり話しよう。

友佳里 ごめん。もうそんな時間ないねん。これで恵を探して。

友佳里、恵の靴を渡す。

乾 何これ。

友佳里 恵の靴。

乾 これでどうしろと？

友佳里 匂いを嗅いで。

乾 ええっ？

友佳里 早く。

乾、靴の匂いを嗅ぐ。

乾 あ、懐かしい。

友佳里 シロ、思い出した？

乾 シロ？

友佳里 乾君はシロやろ？

乾 何ですかシロって？

友佳里 陽子さんが飼ってた犬。使い魔。

乾 犬？ 使い魔？

友佳里 私これ以上は無理やから。お願い。シロしか頼れるのおらんねん。

友佳里、五階のベランダから飛び降りる。

乾 うわっ。

乾、ベランダに駆け出て下を覗く。友佳里の姿はない。

乾 え？ どこ行ったん？ え？ どういうこと？

乾、靴の匂いを嗅ぐ。

乾 あ、懐かしい。

そこへ倉貫が戻って来る。

倉貫 ちょっと。どういうこと？ 何で追いかけて来てくれへんの？

乾 …。

倉貫 なあ。聞いているの？

乾 行かな。

倉貫 え？

乾 よくわからんけど、行かなあかん。助けに行かなあかん。

倉貫 いやいや、私もう自ら帰って来たよ。追いかけてきてくれへんから。

乾 お前ちやうねん。

倉貫 は？

乾 おい、ちょっと叩いてくれ。ちょっと頬つぺた叩いてくれ。

倉貫 え？ いいよもう、そこまで怒ってないから。

乾 いいから叩けって！

倉貫 ええっ？

倉貫、気圧されて乾の頬を思いつきり平手打ち。

乾 痛。

倉貫 大丈夫？

乾 やっぱり夢ちやうわ。

倉貫 え？

乾 ちょっと行ってきます。

倉貫 どこに？

乾、靴の匂いを嗅いで。

乾 よくわからんけど、行かなあかんねん。

乾、立ち去る。その様子は心なしか獣のよう。

倉貫　ちよっと待ってよ。どこ行くん？

倉貫、乾を追う。

夜。片付けの終わった劇団のアトリエ。

田村がやって来る。佇む。

倉貫がやって来る。

倉貫　田村さん、何してるんですか？

田村　いやー、片付いたなあって思っ

倉貫　そうですね。やれば出来るものですね。

田村　そうですね。倉貫さん、財前さんの戯曲ワークショップ受けるんやって？

倉貫　そうですね。市民参加演劇の脚本の共同製作って形なんですけど。私、財前さんの大ファンなんでめっちゃ楽しみにしてるんです。

田村　財前さん、元気にしてるかな。

倉貫　お知り合いなんですか？

田村　何回か一緒に飲み行ったことがあってな。

倉貫　そうですね。か、えーいいなあ。

田村　メタフィクションの手法とか結構影響受けてるかも。

倉貫　やっぱ、そうやと思っ

帰り支度の茂木と衛藤がやって来る。

茂木　田村、私物どうする？　よかったらコンビニまで運ぶけど。

田村　いいよ、明日の朝自分でやるから。みんなほんまにありがとうな。

衛藤　いえいえ。

茂木　そうですね、なあ、あれやろうよ。

田村　あれ？

倉貫　ああ、あれね。

茂木　やろうよ、せっかくやし。

倉貫　とってきます。

倉貫、隣の部屋へ。

田村 ああ、あれ。
茂木 やろうよ、せっかくやし。
田村 せっかくかな。
衛藤 何ですか？
茂木 花火。
衛藤 花火？
田村 昔小道具で使ったやつが残ってて。
茂木 旗揚げで使ったん覚えてない？
衛藤 そんなシーンありましたっけ？

倉貫、バケツと紙袋を持って戻って来る。

倉貫 これですよね。
茂木 (受け取って) これこれ。

茂木と衛藤、ベランダに移動する。

衛藤 蛇花火ありますか？ 蛇花火？
倉貫 蛇花火好きなんですか？
衛藤 あれ面白いやん、ウニユウニユって。
茂木 残念、線香花火しかないわ。
衛藤 えー、煙玉は？
茂木 ないよ。
倉貫 地味なの好きですね。
茂木 いいやん、線香花火。
倉貫 いいですよね、儂くて。
田村 私はあんまりやな。
倉貫 何ですか？
田村 叙情的すぎる。

茂木と衛藤、ライターで線香花火に火をつける。

田村 自分の芝居でもこんな臭いシーン書いたことないよ。
茂木 あのさ、自意識過剰やで。
田村 悪い？ 自意識過剰が私の戯曲の売りやねんから。

倉貫 どういうことですか？

茂木 もう食いつくなく食いつくなく。

田村 まず自意識っていうのは、自分がいて、それを一歩ひいて見てる自分のことやねんけど。自意識過剰っていうのは、その一歩ひいて見てる自分の意識が強すぎるってことやねんな。私ってどう見られてるのかな、変じゃないかなとか。でも実は他人は人のことそんなに見てるわけじゃなくて、そこにズレが生じるわけやけど。要するに人は自分と意識の間に隙間を持っていて、その隙間にこそ人間の自由があるんじゃないかって。それを演劇に応用すると、演劇をやっていることを意識しながら演劇するっていう、あたかも、

茂木 ちよっと田村、そんなしょうもない話してる場合じゃないよ。

田村 どうしたん？

茂木 つかへん。

田村 え？

茂木、いくらやっても線香花火に火がつかない様子。

茂木 そっちは？

衛藤 こっちもつきませんね、

田村 しけってるん違う？

茂木 しけってるんかな。

倉貫 いつの花火なんですか？

茂木 旗揚げの時の花火やから、10年前？

倉貫 そらしけってますよ。

茂木 そっか。

衛藤 残念ですね。

田村 よかったよかった。

衛藤 何ですか？

田村 ここでみんなで線香花火なんかしたら劇的すぎるやん。待って、逆にここで花火がしけてった方が劇的かも。

茂木 ほんま素直じゃないなあ。

倉貫 帰りましょうか。

茂木 帰ろ帰ろ。

衛藤 (花火を片づけながら) これどうしたらいいですか？

田村 いいよ。後で私が片付けとくから。

衛藤 でも。

田村 いいから。今日はほんまにありがとうな。気をつけて帰ってな。

倉貫 はい、また何かあったら声かけてくださいね。
田村 露出狂に気をつけてね。
茂木 露出狂はあんたやる。
田村 そうでした。
倉貫 どういうことですか？
茂木 食いつくな食いつくな。
田村 元気でな。
茂木 うん。
田村 お疲れー。
衛藤 お疲れ様です。

茂木と倉貫、帰る。

田村 あれ？ 何で一緒に帰らんかったん？
衛藤 はい、一緒に帰るつもりやったんですけど。
田村 いっ東京帰るん？
衛藤 明日です。
田村 忙しいなあ。
衛藤 貧乏暇なしですよ。
田村 後は一人でできるから。今から出たら追いつけるよ。
衛藤 田村さん。
田村 なに？
衛藤 何で嘘つくんですか？
田村 え？
衛藤 ここ取り壊しになるとか。取り壊しにならないでしょ。ここ。
田村 …何で知ってるん？
衛藤 調べたんですよ。おかしいなって思っ
田村 どうやって？
衛藤 こっちに不動産関係の知り合いがいて、それで。
田村 それ、今ここで言い出す？ わかった。じゃあ聞くけど、衛藤君こそ何で嘘つくん？
衛藤 え？
田村 私も調べたんやから。ここの家賃どんどん値下がりするし、おかしいと思っ
も知り合いの不動産屋に頼んで調べてもらったよ。ここ今の大家さんの本当の名
前、衛藤和重っていうんやっ
田村 …。

衛藤 衛藤君、向こうでどんな仕事してるん？

衛藤 だから人材派遣会社で働いています。派遣する方で。

田村 どんな人材派遣会社が入社二三年でここが買えるような給料もらえるん？

衛藤 女性専用なんですよ。

田村 女性専用？

衛藤 スカウトして、キャバクラとか風俗に派遣するんです。いわゆる女街ってやつですね。

田村 何してるの？ 役者やるって東京行ったん違うの？

衛藤 まあいろいろあって。

田村 うちの看板俳優が情けない。それで、そんなあんたに援助されてた私も情けない。最初はね、食うに困って始めたんですけど、どうもね天職みたいで。笑けるほど儲かってしまったんですよ。通帳の残高がどんどん増えていくです。俺には大して使えない道もないのに。それでたまたま、田村さんのこと聞いて。

田村 何のつもりなん？ 同情？

衛藤 …鐘をね、撞き続けてほしかったんですよ。

田村 鐘？

衛藤 一度でも忘れると、田地田島、陸は水になる、沼になる、淵になる。

田村 ならへんよ。私が鐘撞くのやめても、何も起こらへん。

衛藤 起こりますよ。俺は知ってるんです。夜叉ヶ池があります。

田村 どこに？

衛藤 どこか、俺らのすぐそばに。

田村 だいたいここ何年も、ちゃんと鐘なんて鳴らしたことないんやから。

男の声 すみませーん。

衛藤 誰ですか？

田村 さあ。

昼に来た眼鏡の男が扇風機を抱えてやって来る。

眼鏡男 よかったー。まだ人がいて。

田村 昼間の。

衛藤 昼間の？

眼鏡男 これやっぱり譲ってもらえませんか？

田村 あ、はい。

眼鏡男 じゃあこれ、一万二千円。

田村 あ、どうも。

眼鏡男 ありがとうございます。

田村 いえいえ。

眼鏡男、一礼して扇風機を持ち去る。

田村と衛藤、顔を見合わせる。

衛藤 よかったですね。

田村 うん。

衛藤 じゃあ俺帰りますわ。

田村 ちよっと、まだ話途中やろ。

衛藤 今日中に帰らないといけないんですよ。一人出勤ぐずってる女がいるんで、尻叩かないと。

田村 最低やな。

衛藤 田村さん、鐘、撞き続けてくださいね。

田村 だから勝手なこと言わんといてって。私はここ出て行くよ。

衛藤 例の新作楽しみにしてます。アトリエの片付けのやつ。書くんでしょ？

田村 ああ、うん。

衛藤 それじゃ、お元気で。

衛藤、立ち去る。

田村、バケツを抱えて立ち去る。

夜。玉乃と市頭のアパート。

隣の部屋から市頭と塚井がやって来る。塚井は旅行鞆を提げ、手には先ほど山分けにしたばかりの現金の封筒。

市頭 ほな。

塚井 はい。長居しすぎました。(腕時計を見て)間に合うかな、まだ大丈夫か。

市頭 おい、金は鞆に入れて行ったらどうや。

塚井 そうですね。

市頭 落としたら大変やぞ。

塚井、封筒を鞆にしまう。

塚井 市頭さん。

市頭 何や。

塚井 市頭さんはこれからどうするんですか？ 市頭さんも早くこの町出た方がいいですよ。

市頭 わかっている。

塚井 逆子が血眼になって探し回ってるらしいですから。

市頭 ただな、あいつを説得せなあかんからな。

塚井 玉乃さんですか？

市頭 俺のことは心配せんでも大丈夫や。お前こそ、気を付けてな。

塚井 はい。…真壁さんのことですけどね、あんなことになってしまつて、残念でしたけど。実は少しほっとしてるところあるんですよ。五年前のあの日以来、俺らはずっと縛られてきたじゃないですか。

…。

市頭

すみません、最後なんでちょっと喋りすぎました。

塚井

いや、それは俺も同じや。何であんなことしてもたんやろな。

市頭

でもこれでやっと自由になれるじゃないですか。

塚井

そうかな。

市頭

そうですよ。

市頭 まあ、お前がもつとまともな仕事について方がいいのは確かやな。裏の仕事は向いてないわ。

玄関のチャイムの音。

市頭

来た来た。

市頭、玄関へ。

市頭声

裏山の犬にでも。

玉乃声

喰われろ。あれ？ 誰か来てるの？

市頭声

塚井。

玉乃声

ちようどいいわ。

玉乃と市頭がやって来る。玉乃の手にはドーナツの箱。

玉乃

こんばんは。

塚井

こんばんは。お邪魔してます。

玉乃

ちようど良かった。ドーナツ食べませんか？

塚井

ドーナツ？

玉乃 百円のセールやってたんで買って来たんですよ。

塚井 ああ、でも、もう出ないといけないんすよ。

玉乃 そうですか。残念。

塚井 すみません。それじゃ市頭さん、まあ頑張ってください。

市頭 おう。

塚井 お元気で。姉さんもお達者で。

市頭 姉さん言うな。

塚井、立ち去る。

玉乃 コーヒーでも入れる？

市頭 おう。

玉乃 課題図書は読んだ？ どうせ読んでないんやろうけど。

市頭 読んだよ。

玉乃 え？

市頭 Pが女性に対して行っていることは、論理が世界に対して行っていることと同じである。本来多様であるはずの世界を、論理は抑圧し単純化する。俺たちが触れているのは世界のほんの一部にすぎない。

玉乃 …どうしたん？

市頭 たまにはちゃんとしようと思って。

玉乃 台風でも来るんとかがう？

と外から塚井の悲鳴。階段から人が転げ落ちる音。

玉乃 なに？

市頭 …。

市頭、玄関の外へ。血相を変えて戻って来る。

市頭 やばい。

玉乃 どうしたん？

市頭 隠れる。

玉乃 え？

市頭 早く。

市頭、ベランダに玉乃を押し出し、サッシとカーテンを閉める。

都市迷彩の雨合羽を着た男(逆子の辰次)が部屋に入ってきて来る。塚井の返り血を浴び、手にはドスを持っている。

辰次　こんばんは。

市頭　…。

辰次　俺が誰か、わかるか？

市頭　逆子の、辰次。

辰次　逆子って言うな。

市頭　悪い。

辰次　何で来たんか、わかるか？

市頭　森に言われてきたんか。

辰次　そうや。

市頭　俺を殺しに。

辰次　そうや。

市頭　ちよっと待ってくれ。

辰次　何で俺が、逆子の辰次って呼ばれてるかわかるか？

市頭　…何でや。

辰次　俺が逆子やからや。

市頭　お、おう。

辰次　今そのまんまやなって思ったやろ？

市頭　…思った。

辰次　殺す。

辰次、ドスを構えて迫る。

市頭　ちよ、ちよっと待ってくれ。

辰次　お前も真壁もアホやなあ。あんな占い師に騙されて。

市頭　(ポケットから封筒を出して)ここに四十万ある。これで見逃してくれ。
辰次　俺は森さんのために動いてる。金に興味はない。

いよいよ思われたその時。

辰次　それより、あれは何や、ドーナツか。

市頭　お、おう。

辰次　…開ける。

市頭　え？

辰次 早く開ける。

市頭 辰次に脅されてドーナツの箱を開ける。

辰次 ポンデリングあるか？

市頭 え？

辰次 ポンデリング。

市頭 あるけど。

辰次 (手を出して)おい。

市頭 え？

市頭 ドーナツの箱を向ける。辰次、ポンデリングを取って食べる。

辰次 ポンデリングめっちゃ好きやねん。

市頭 …おう。

辰次 お前も食えや。

市頭 え。

辰次 遠慮せんと食わんかい。

市頭 わ、わかった。

市頭 ドーナツを取って一口食べる。

辰次 俺、晩飯食ってなかったんや。よかったなあ、ちよつとだけ長生きできて。

市頭 むせる。

辰次 せっかくやから、何で俺が逆子の辰次って呼ばれてるか教えたるか？

市頭 …。

辰次 俺のオカンは美人やってなあ。スタイル抜群。ツイッギーっておったやろ。

市頭 ツイッギー？

辰次 あんな感じでな。女優やったんや。女優っていうてもポルノ女優やけどな。とにかく美人で売れっ子やったんや。それが俺を妊娠したお陰でな、俺が逆子やっただけで、(お腹を示して)ここに大きな傷ができてしまった。女優は引退、酒浸りになっただけで、ブクブク豚みたいに太って、自殺してもてな。俺が逆子やっただけで人生狂ってしもたんや。俺は生まれながらにして罪を背負ってしもたんや。どううや、悲しい話やろ。

辰次、ドスを構えるとゆっくりと市頭に近づく。

辰次 何でこんな話するかっていうたら、まあ儀式やな。ゆっくりやる時はいつもこの話することにしてるねん。

市頭 ちよっと待ってくれ。話を聞いてくれ。

辰次 うっ。

辰次の動きが止まる。

辰次 うー。

辰次、急に苦しみだす。

辰次 うっ。

辰次、倒れる。

市頭 え？ 何？

市頭、恐る恐る辰次に近づくが、辰次はピクリとも動かない。

市頭 おい。どうしたんや？ 何が起こったんや？

玉乃声 ヤマトリカブト。

市頭 え？

ベランダのサッシが開くと、カーテンが大きく風に揺れる。
カーテンがひとりでに勢いよく開く。玉乃が立っている。

玉乃 ヤマトリカブト。ヨーロッパでは魔術の女神ヘカテを司るとされている、キンポウゲ科、トリカブト属の多年草。花言葉は復讐。アルカロイド系の有毒植物。摂取すると四肢の麻痺、呼吸困難から心不全、死に至る。
あれ？ 何か俺も気分が悪くなってきた。あれ？

玉乃 ごめんな。

市頭 え？ 何で謝るん？

玉乃 ごめんな。

市頭 あれ？ 何かヤバいぞ。息が。
玉乃 一口しか食べてないからすぐには死なへんよ。
市頭 え？

市頭、倒れる。

玉乃 覚えてる？ 五年前の夏。西野森公園であんたらがやったこと。覚えてるやんな？

市頭 …あの時の？

玉乃 私らの大切な人やってん。

市頭 それで、その為にわざわざ？

玉乃 これは手始めやねん。

市頭 手始め？

玉乃 私は決めた。全ての理の外にある者の為に闘うって。自分たちに理解できないものを抑圧し、排除する奴らを私は呪い殺す。私が全員呪い殺す。死ねばいいねんみんな。思い知ればいいねん。

玉乃、落ちていたドスを拾って市頭の側に立つ。

玉乃 結構楽しかったんやけど。一緒におって。あんたがあんなことさえてなかった

らよかったのに。

…ごめん。

玉乃 今更謝られても、もう遅いよ。

玉乃、ドスを構える。

玉乃 なあ、何であんなことしたん？

乾 ちょっと待ってください。

乾が立っている。手には恵の靴。

玉乃 誰？

乾 あの、えーっと、友佳里さんの、友達の、乾です。

玉乃 お姉ちゃんのこと？

乾 はい。

玉乃 何で？

乾 友佳里さんに頼まれて。

玉乃 だって今お姉ちゃん。

乾 だから代わりに来たんです。

玉乃 何しに？

乾 復讐は無し。なんじゃないですか？

玉乃 あんたには関係ないやろ？

乾 ありますよ。あるんです。僕は、シロなんです。

玉乃 シロ？

乾 陽子さんや、友佳里さんや、恵さんに可愛がってもらってた。ほら。

乾、四つん這いになる。

乾 見覚えありあません？ 一面影ありませんか？

玉乃 あのシロ？

乾 はい。

玉乃 シロが何で？

乾 恩返しです。こんなこともうやめてください。

玉乃 私は決めたって言うたやろ？ 私らにも関わらなあかん時があるねん。四百年前から何も変わってない。あの時も私の仲間が大勢殺された。酷い殺され方した。今も殺されてる。鈍感な連中は何もわかってない。自分で自分の首絞めてるのに気づいてない。気づかせんとあかんねん。

乾 恵さん、それでも裁いたら駄目なんですよ、僕らは。自由で多様で多義的な生き方っていうのは全てを肯定するってことでしょ。いいことも悪いことも。違いますか？ 世界に対する全面的な肯定なんですよ。

乾、四つん這いのまま恵に近づいていく。

乾 それが陽子さんの生き方やったじゃないですか。すごく難しいことですけど。困難なことですけど。

乾、ゆっくりと恵のドスを持っている手をとる。

乾 それでも僕らは、その生き方を選ばんとだめなんですよ。…あれ？ 何で俺こんなこと言うてるんやろ。

玉乃 …お姉ちゃんの受け売りやろ？

乾 そうです。

玉乃 もう遅いよ。

乾 遅くないですよ。この人だけでも許してあげてください。

玉乃、市頭を見る。市頭、既に意識を失っている。

玉乃 ……わかってたんやけどな。間違ったことしてるって。

玉乃、ゆっくりとドスを離す。ドスは乾の手の中に。

玉乃 だってこの人、すごくいい人なんやもん。何でこの人があんなことしたのか。わからん。

ゆっくりと暗転。

エピソード

夕方。市立少年少女会館の和室。

小川 ここでちょっと待っててくれるかな。

財前 いいけど。

小川 あの人らもう出ると思うし。

財前 もう六時やぞ。

小川 六時やねんけど。

財前 また例の団体？

小川 悪い。

財前 まあいいけど。

小川 で、脚本の方はどうなん？ 後ちよっとなんやろ？

財前 後ちよっとなんやけど。エピソード書いて、あと全体的に手直しもせんとな。

小川 頼むぞ。リーディング公演になるかどうかの瀬戸際なんやから。

財前 でも実質今、根本さん一人やからな。やっぱあの人二人の復帰は難しそう？

小川 難しいやろ。

財前 何食ったらそうなるん？

小川 何でも山菜と間違えて毒のある草食べたらしい。命に別状がなくてよかったよ。

根本がやって来る。

根本 おはようございます。

財前 おはよう。

小川 おはようございます。

根本 今日もここで待機ですか？

小川 そうやねん。ごめんなさい。

根本 いえ。

小川 俺ちよつと見て来るわ。

財前 おう。

小川、立ち去る。

根本 倉貫さんと乾君は？

財前 今日もお休み。

根本 そうですか、心配ですね。

財前 心配やわ。

根本 続き、書いてきましたよ。はい。

根本、脚本を財前に渡す。

財前 ありがとう。もう根本さんだけが頼りやから。

根本 はい、私、あの二人が帰って来るまで頑張ります。あの、それですね、お願いがあるんですけど。

財前 なに？

根本 やっぱり、沖田総司出したらだめですか？

財前 何で？

根本 出したいからです！

財前 うーん、じゃあもういいよ出して。

根本 やった。

財前 それでモチベーションが上がるんやったら。何でもいいから書いてきて、話はそれから。

小川、戻って来る。

小川 お待たせ。会議室空いたよ。

根本 はい。

根本、立ち去りかけて立ち止まる。

根本 財前さん、ほんとにここから私の好きなように書いていいですか？

財前 いいよ。

根本 わかりました。私、すっごいの書いてきますから。

財前 楽しみにしてるわ。

根本 それじゃどうぞ、ごゆっくり。うふふ。

財前 うふふ？

根本、立ち去る。

小川 どうしたん？

財前 何かわからんけど、急にやる気になったみたい。

小川 ふーん。

小川、ゆっくりと財前に近寄ると、後ろから抱き締める。

財前 …おい。やめろよ。こんなところで。

小川 いいやん。ちよっとだけ。充電させてくれ。

財前 やめろって。

財前、小川から離れる。

小川 けちー。

財前 誰か来たらどうするねん。

小川 なあ。前から聞きたかったんやけど。

財前 なに？

小川 俺のせいなんか？

財前 何が？

小川 俺は、お前はもっと普通の仕事につくと思ってたんやけど。

財前 脚本家は普通の仕事じゃないの？

小川 そういうわけじゃないけど。

財前 まあ言いたいことはわかるよ。俺も最初はさ、自分の個人的な体験から出発したか

ら。お前とのこととか。その捌け口として脚本書き始めたっていうのはあるかもし
れん。でも今は違うねん。今やることが本当に好きになってしまっただけな。どう

小川 やったら恩返しできるか。そればっかり考えてる。おこがましいっていうのはわか
ってるんやけど。だからこの仕事持って来てくれたお前には感謝してるよ。
財前 そっか。そう思ってくれてたら嬉しいわ。
さてと、行くかな。たった一人になってしまった教え子が待ってるからな。

財前と小川、立ち去る。

夕方。倉貫と乾のアパート。

カーテンは開いているが、サッシは閉まっている。

倉貫と乾がワークショップに出かけようとやって来る。

倉貫 早く、戯曲ワークショップもう始まっているよ。

乾 えー、どうしても行かなあかんの？

倉貫 当たり前やん、もう一週間も休んでるんやから。

乾 俺もう財前さんに会いたくないんやけど。

倉貫 何言うてんの、あんだけ気に入られてるって自慢してたのに。

乾 ええやんもう根本さんに任せといたら。

倉貫 あの子に任せといたら大変なことになるよ。特に財前さんと小川さんが。

乾 俺もう電話してもうたよ。ハイキング行って山菜とトリカブト間違えて食べて寝込
んでるって。

倉貫 何でもっとマシな嘘つかれへんの？

乾 だってとっさに思いつかへんかったからさ。

市頭、やって来る。

市頭 気をつけて行ってきてくださいね。

倉貫 すみません。お留守番お願いできますか？

市頭 はい、任せてください。

乾 お前、市頭さん病み上がりやねんから、独りにしたらあかんやろ。やっぱり俺残る
わ。

市頭 いや、もう大丈夫なんで。心配しないでください。

乾 でも。

市頭 俺の方こそすみません。

市頭、土下座して。

市頭　いつまでもお世話になって。迷惑にならないように出来るだけ早く出ていきますんで。

乾　そんな、無理しなくていいですよ。

市頭　よかったら、洗濯もしておきますんで。

倉貫　あ、お願いできますか？

乾　市頭さん病み上がりやねんど。(市頭に)そんな洗濯とか、いいですから。

倉貫　元はといえば乾君の当番の日やろ？

市頭　大丈夫です。任せてください。お洒落着は洗濯ネットに入れて、エマールで洗います。

乾　そ、そうですか？

倉貫　じゃあほら行くよ。

倉貫、立ち去る。

市頭　乾さん。

乾　はい。何ですか？

市頭　やっぱりもう鼻はききませんか？

乾　そうですね。あの時以来。もしかすると友佳里さんがあの時だけ僕に何かしたのかも。

市頭　そうですか。

乾　また会いたいんですか？

市頭　いえ、そういうわけじゃ。あれで許されたとは思ってませんし。

乾　でもこの町にいるのは確かですよ。もしかすると、いつかまた。

市頭　そうですね。

倉貫、戻って来る。

倉貫　あの、お話し中申し訳ないんですけど、時間が。

乾　じゃあ行ってきます。

市頭　はい。

倉貫　留守番お願いしますね。

市頭　はい。

倉貫と乾、立ち去る。

市頭、洗濯物を取りに隣の部屋へ。
しばらくしてベランダに恵が現れる。

サッシがひとりでに開く。

恵、部屋の中を覗く。

友佳里が現れる。

友佳里 恵。

恵 …。

友佳里 行こう。

恵 …うん。

友佳里と恵、立ち去る。恵、少し名残惜しそうに。

市頭、洗濯カゴを抱えて戻って来る。サッシが開いていることに驚く。

市頭、ゆっくりとベランダに出て空を見上げる。

空は茜色に染まっている。

市頭 裏山の犬にでも、

どこからともなく声が聞こえてくる。

恵 …食われる。

おしまい。

参考文献

『夜叉ヶ池・天守物語』泉鏡花

『マクベス』シェイクスピア 福田恆存 訳

岩波文庫

新潮文庫